HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	アウグスト・ベークと文献学
著者	安酸，敏眞
引用	北海学園大学人文論集，37：174-128
発行日	2007-10-00

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

アウグスト・ベークと文献学

安酸敏眞

はじめに

本稿は、文化史ならびに思想史研究の方法を検討する試みの一環として、十九世紀のドイツにおいて近代的な学問としての「文献学」を確立した、アウグスト・ベーク（August Boeckh, 1785-1867）[1]の人となりを、とくに彼が構想した文献学との関わりにおいて、叙述することを目的としている。なぜベークの文献学を問題とするかといえば、彼の講義ノートに基づいて死後出版された『文献学的諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』*Encyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften*[2]――この書はベークの文献学の方法と体系を知る上でまず参照すべき最重要書物である――のなかには、文化史ならびに思想史研究の方法に関して、傾聴すべき実に意義深い創見が見出されるからである。実際、文献学に関するベークのこの講義は、学生としてそれを受講したドロイゼンの『歴史論』*Historik*[3]に甚大な影響を及ぼしただけでなく、ドロイゼンがこの書で打ち出した「探究的理解」(forschend zu verstehen)[4]の方法は、やがて「現代の思想史の父」(the father of the modern history of ideas)[5]と呼ばれるディルタイの解釈学に継承されさらに深められて、現代における文化史ならびに思想史研究の重要な方法の一つとなっているからである。[6]

わが国においても、いち早くベークの文献学的方法から多くを学び、それを思想史研究に応用した実例がある。村岡典嗣の「日本思想史研究」がそれである。村岡は波多野精一のもとでギリシア哲学、とくにプラトン哲学を学び、もともとはギリシアの研究家を

志していた。しかし波多野の助言もあって、幼少の頃から馴染んでいる日本思想史研究の道に方向転換したのであった。[7] 村岡がいつからベークに着目したかは承知していないが、おそらく学生時代のプラトン研究を通じて、ベークの著作に触れたのであろう。彼はすでに処女作『本居宣長』(警醒社、一九一一年)において、ベークの「知られたることを知ること」(Das Erkennen des Erkannten)という言葉を引き合いに出し、それをみずからの本居宣長研究の方法的基礎に据えている。[8] その後、村岡は折りに触れて「人間の精神から産出されたもの、即ち認識されたものの認識」というベークの標語を引証しているが、いずれにせよ彼の「日本思想史の研究方法」は、ベークの文献学的方法の応用的展開という意味合いをもっている。[9]

筆者は村岡の卓越した日本思想史研究の業績に刺激を受け、その方法論的基礎となったベークの文献学に興味を抱いたのであるが、調べてみるとわが国においては、ベークを正面から扱った本格的研究はいうまでもなく、少し詳しい伝記的叙述もほとんど存在しない。それゆえ、ベークの文化史ないし思想史研究の方法についての掘り下げた分析を行なう前に、まずは伝記的な側面を浮き彫りにすることが求められる。そこで本稿では、今後の体系的研究のための足場を築くために、ベークと彼を取り巻く人間模様を叙述すると同時に、彼の文献学の基本的特質を明らかにすることを試みてみたい。

一

アウグスト・ベークは、一七八五年一一月二四日バーデン州のカールスルーエに、六人兄弟姉妹の末っ子として生まれた。ベーク家の先祖は十五世紀末以後、ロ

August Boeckh war zu seiner Zeit eine der herausragendsten Persönlichkeiten des deutschsprachigen Raums

マンティック街道沿いの自由都市ネルトリンゲンの市民として暮らし、十七世紀以降は、代々プロテスタントの牧師職を務めてきていた。父ゲオルク・マテーウスは聖職には就かず、宮廷顧問官秘書兼公証人という職に就いていたが、彼の兄クリスティアン・ゴットフリートはネルトリンゲンの牧師で、一七九二年に亡くなったときには司教座聖堂大執事の要職にあった。ゲオルク・マテーウスは兄に先立つこと二年、一七九〇年に不帰の客となったが、そのときアウグストは弱冠五歳の幼児であった。父が亡くなったとき医学生だった長兄ヨーハン・ゲオルク（1767-1853）は、その後立派な医師となって天寿を全うしたが、次男は士官学校生徒として対仏戦争の戦地に赴き、一七九三年にルクセンブルクの原野であだない生涯を終えた。三番目の兄クリスティアン・フリードリヒ(1777-1855)は、父親の急死によってギムナジウムでの勉学を一時的に中断せざるを得なかったが、その後の巻き返しによって驚異の出世を成し遂げ、一八二一―四四年バーデン州の財務長官を務め、一八二五年には爵位を授与された。その後、一八四四―四六年にはさらに州の大統領にまでなった。生涯独身を貫いた長姉フリーデリケは久しく伯爵夫人に仕え、一八五四年にカールスルーエでその生涯を終えた。次姉マリーはロシアの皇帝アレクサンダー一世の宮廷官と結婚し、一八五八年にレヴァル（現エストニアのタリン）に没した。兄弟姉妹はお互いに仲睦まじく、生涯にわたって親しい交わりを続けた。

父親の死によって、アウグストの一家は経済的に大いに困窮したが、それでも母親の理解と計らいで、アウグストは人並み以上の教育を受けることができた。彼は一七九一年から一八〇三年まで、カールスルーエにある地元のギムナジウム(Gymnasium illustre)で学んだが、そこは古典語と数学の教育に定評があった。ご多分に洩れずベークも古典語の他に、とくに数学の勉学に大いなる関心を抱いた。彼はこのギムナジウムで、ヘーベル(Johann Peter Hebel, 1760-1826)、ティッテル(Gottlob August Tittel, 1739-1816)、ベックマン（Johann Loreny Böckmann, 1741-1802）などの優れた教師から、古典語、哲学、数学などの学問的基礎を徹底的にたたき込まれた。一八〇三年、彼は優秀な成績でギムナジウムを卒業すると、州政府の奨学金を支給されて、神学者になるべくハレ大学に赴いた。[10] ベークは幸運にもその大学で、彼の将来に決定的な影響を及ぼすことになった、二人の傑出した学者と出会うことになった。一人は古典文献学者のフリードリヒ・アウグスト・ヴォルフ（Friedrich August Wolf, 1759-1824）であるが、まさに脂の乗りきった全盛期のヴォルフは、若きベークをギリシア文化の多様性と永続的意義へと開眼させた。もう一人は、一八〇四年に神学部の

（一二一）

員外教授としてハレにやってきた、フリードリヒ・シュライアーマッハー（Friedrich Schleiermacher, 1768-1834）である。彼は神学部で教える傍ら、隣接する哲学部でプラトンに関する講義も担当しており、ベークはこの講義によってプラトン研究へと導かれた。かくして、この二人の偉大な学者との出会いを通して、ベークは神学者になるという当初の道を捨て、古典文献学者の道を歩み出すことになった。[11]

一八〇六年、あのイェーナの会戦に象徴されるように、ドイツ（プロイセン）はナポレオン軍に歴史的な大敗北を喫し、国家存亡の危機に瀕したが、ベークはまさにこの年にハレ大学を卒業すると、首都ベルリンへと赴いた。そこには恩師のヴォルフとシュライアーマッハーが一足先に移り住んでいた。ここでベークは、当地のギムナジウム校長ベラーマン（Johann Joachim Bellermann, 1754-1842）が主宰する上級ゼミナールに受け入れられ、またそのギムナジウムでラテン語、フランス語、歴史学を教えた。ほどなくブットマン（Philipp Karl Buttmann, 1764-1829）やハインドルフ（Ludwig Friedrich Heindorf, 1774-1816）と親しくなり、「ベルリン・ギリシア協会」（通称グラエカ）を設立した。しかし一八〇七年、フランス軍がベルリンにまで進攻して来るに及び、彼は郷里に戻ることを決意し、ハイデルベルク大学にポストを得るために、大急ぎで博士論文を完成させ、それをハレ大学に提出して学位を取得した。[12]

二

一八〇七年一〇月、弱冠二十二歳のベークはハイデルベルク大学の古典文献学の員外教授に就任した。教授のフリードリヒ・クロイツァー（Friedrich Creuzer, 1771-1858）は、一八〇四年にマールブルクから移動してきてまだ日も浅かったが、二人の間にはすぐに良好な人間関係が成立した。クロイツァーはアヒム・フォン・アルニム（Achim von Arnim, 1781-1831）やクレメンス・ブレンターノ（Clemens Brentano, 1778-1842）などと密接な交流をもっていたので、ベークも彼を介して、こうした後期ロマン派の詩人たちとの交わりの輪に入った。このサークルにおいて、ベークは「博学者」（Polyhistor）として一目置かれたという。

ベークはのちにハイデルベルク時代を「金冠で飾られた青春時代」と言い表しているが、美しい自然と豊かな精神的交流のなかで、

彼の学者生活は順調な滑り出しを始めた。この時代のベークの研究は、主としてプラトンとその周辺に向けられている。就任の翌月、ベークは早速プラトンの『ティマイオス』についての批判的注釈の一部[13]を公にしているが、これは数ヶ月前の論文「プラトンのティマイオス篇における世界霊魂の形成について」[14]と通底している。プラトンの宇宙論に対する関心は根強く、ベークはこの主題はその後二つの論文で追求している。[15]プラトン研究以外に、ギリシア悲劇作家やピンダロスについても、ベークはこの時期すでに本格的研究に着手している。

一八〇八年から一八〇九年にかけて、ベークは大勢の教授たちによって創刊された『ハイデルベルク文学年報』*Heidelbergische Jahrbücher der Literatur* の編集に携わり、みずからも幾つかの書評を掲載したが、そのなかでも特筆すべきは、シュライアーマッハーのプラトン翻訳についての書評である。ベークはこの件に関して、恩師のシュライアーマッハーに次のような書簡を送っている。「弟子が師を論評するということは、わたしとても好むところではありませんでした。しかし啓蒙された現代では、われわれはそれを乗り越えています。ですから、わたしはもはやそれ以上躊躇しませんでした」（一八〇八年二月九日付けのシュライアーマッハーへの書簡）。ちなみに、その書評の一部を紹介すれば、ベークはシュライアーマッハーの仕事をこう評価している。

> この人ほどプラトンを完全にみずから理解し、他の人にも理解するよう教えた人はこれまで誰もいなかった。彼は至高なものを稀有の仕方で包握しながら、それに劣らぬ入念さをもって、極小のものをも侮らずに扱う。これはごくわずかの学者のなかで発達した才能であり、またごくわずかの対象に裨益した幸運である。これにひきかえ従来は、大抵の対象はあまりに思慮もなく突飛な仕方で、あるいはあまりに偏狭な冷静さで、取り扱われてきたのであった。[16]

一八〇九年の初頭、ケーニヒスベルク大学から正教授としての招聘が舞い込んだが、ベークはこれを固辞してハイデルベルクに留まった。ほぼときを同じくして、教授のクロイツァーがライデン（オランダ名レイデン）大学に移籍したので、そのあとを受けてベークは、一八〇九年三月六日、ハイデルベルク大学の古典文献学の正教授に就任した。同年の一〇月四日、ベークはゲッティンゲンの

（一二三）

教区総監督ゴットフリート・ヴァーゲマンの娘ドロテーアと華燭の典を挙げた。すべてのことは順調に進んでいたように思われたが、しかし必ずしもそうはいかなかった。ベークよりも一足先に員外教授として採用されていたハインリヒ・フォスの父親でホメロス翻訳家のヨーハン・ハインリヒ・フォス（Johann Heinrich Voss, 1751-1826）が、ベークに対して敵対心を露わにしていたからである。一八〇九年四月一六日付けのダーフィト・シュルツへの書簡において、ベークはこう記している。「フォスはここではまことに大学に住み着いた悪魔のようなもので、諍いの種を蒔くことしかしません。……息子の方はより穏和な性格ですが、父親を馬鹿に崇拝しているために、一度として自分自身の考えが貫けません。わたしはわが道を行っていますが、すべての人間的権威に対しては反対する、根っからのプロテスタントです。ですから、わたしはひとをむやみに褒めちぎろうとする、猿やムガール帝国皇帝のようなこの手合いを、決して好きになれません。[17]」

こうした状況のなかで、クロイツァーがライデンの環境に馴染まず、九月にハイデルベルクに戻ってきたことは、ある面ではベークにとって歓迎すべきことではあったが、他面では新たな確執の要因ともなりかねなかった。ベークがすでに正教授に就任していたために、クロイツァーの舞い戻りは二人の正教授が競い合う状況をもたらしたからである。そうしたところに、一八一〇年九月、新設のベルリン大学から好条件の招聘状がもたらされた。シュライアーマッハーとブットマンが背後で尽力したお陰もあるが、ベーク自身はこの招聘を迷わず受諾して(新妻のドロテーアには少なからぬ躊躇があったと思われる)、「新設大学の新鮮かつ力強い精神への愛情に基づいて[18]」ベルリンへと赴く決意を固めた。プロイセン当局としては、大学開設初年度の冬学期（一八一〇年秋）からの着任を要望していたが、ハイデルベルク大学での職務義務が残っていたため、具体的な着任は翌一八一一年の夏学期からということになった。ベークが具体的にベルリン大学に着任したのは、翌一八一一年のイースターの前後であった。

三

一八〇九年八月一六日、プロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム三世は、ベルリン大学設立の命令を下し、翌年の秋には講義が開始される運びとなった。主要な人事構想は、枢密顧問官として教育行政の最高責任者の地位にあったヴィルヘルム・フォン・フン

ボルト(Wilhelm von Humboldt, 1767-1835)に託された。かくしてシュライアーマッハー、サヴィニー(Friedrich Karl von Savigny, 1779-1861)、フーフェラント（Christoph Wilhelm Hufeland, 1762-1836)、フィヒテ（Johann Gottlieb Fichte, 1762-1814)、ヴォルフ、ニーブール（Barthold Georg Niebuhr, 1776-1831）といった錚々たる顔ぶれが教授陣に名を連ねることになった。古典文献学の教授ポストには当初、ライプツィヒ大学教授のゴットフリート・ヘルマン（Gottfried Hermann, 1772-1848）が第一候補として名前が挙がった。しかし折衝がうまくいかずヘルマンが招聘を固辞したため、弱冠二十五歳のアウグスト・ベークに白羽の矢が立てられたのであった。ベークへの正式な招聘状は一八一〇年九月四日付けで送付された。プロイセンの文部官僚ニコロヴィウスから提示された就任の条件は、年収一五〇〇ターラーに加えて旅行費用二〇〇ターラーというものであった。直ちに引っ越しの支度に取りかかりたいベークではあったが、先に述べたような事情で、一八一〇／一一年の冬学期はハイデルベルクに留まって、残っている職務の遂行に努めざるを得なかった。ちなみに、このときベルリン大に招聘されたハイデルベルク大学の同僚には、神学者のマールハイネケ（Philipp Marheineke, 1780-1846）とデ・ヴェッテ（Wilhelm Martin Leberecht De Wette, 1780-1849）や、さらに歴史学者のヴィルケン（Friedrich Wilken, 1777-1840）などがいた。

ベルリンに到着したベークは、すぐに「ギリシア協会」の旧知のメンバーと連絡を取り、再びその輪のなかに加わった。一八一一年四月二日付けの妻への書簡によれば、このサークルのメンバーとしては、ブットマン、ハインドルフ、イーデラー(Christian Ludwig Ideler, 1766-1846)、シュライアーマッハー、シュパルディング（Georg Ludwig Spalding, 1762-1811)、ヒルト（Aloys Hirt, 1759-1837)、ズュフェルン（Johann Wilhelm Süvern, 1775-1829)、ニーブールと彼の名前が挙げてある。大御所ヴォルフはこの集会には加わっていなかった。彼は病気がちでわがままになり、大学の授業でもハレ時代のような往年の活力はもはや失っていた。ハレ時代にヴォルフのもとで雌雄を競ったベッカー（August Immanuel Bekker, 1785-1871）も、ヴォルフの推挽で一八一〇年からベルリン大学のスタッフに名を連ねていたが、彼はすぐには着任せず、当時大臣を務めていたフンボルトの許可をとらないまま、パリに在外研究に出かけていた。ベッカーのパリ滞在は三年半に及んだが、研究休暇の申請も一部受け入れられて、彼のベルリン大学着任は、正式には一八一二年からということになった。[19]

（一二五）

ベークがベルリン大学の一員となったのは、一八一一年の夏学期からであるから、大学としては開学から半年、つまり一学期がすでに経過していたことになるが、彼をベルリン大学建学の父祖たちの一人に加え得る理由は、彼が最年少の正教授でありながら、シュライアーマッハー、サヴィニー、医学者ルードルフィ（Karl Asmund Rudolphi, 1771-1832）と並んで、大学の根本的定款を作成する委員会のメンバーとして、「大学の定款を起草した父祖たちの一人」（einer der Väter der Verfassung der Universität）[20]となったからである。いずれにせよ、ベークは一八一一年から一八六七年まで、五十六年の長きにわたってベルリン大学で教え、まさにヴィルヘルム・フォン・フンボルト大学の顔であり続けた。実際、その間哲学部長を六回、学長を五回も務め、大学創立五十周年の式典も学長としてみずからの手で挙行している。[21]言うまでもなく、大学設立時の正教授でこの五十周年記念の式典に現役スタッフとして参加した者は、ベークをおいて他に誰もいない。フンボルト、フィヒテ、シュライアーマッハー、サヴィニー、ヴォルフ、ヘーゲル（Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770-1831）[22]、ランケ（Leopold von Ranke, 1795-1886）[23]など、ベルリン大学の名声を世界に轟かせた学者は多くいるが、ベークほどベルリン大学の命運に深く関わった人物はいない。古典文献学という学問が、それほど広まらなかったわが国においては、ベークの名前はこれらの人物の陰に隠れて忘れ去られているが、草創期のベルリン大学にあって、彼は半世紀以上にわたって要職を歴任した。それは彼が人間ならびに学者として同僚の間で信望が厚く、また行政家としても有能だったからにほかならない。

さて、ベークが就任した古典文献学の教授のポストは、同時に「雄弁ならびに詩歌の教授」（professor eloquentiae et poeseos）のポストでもあり、古い大学の慣行に倣って、彼は毎学期の始めに刊行されるラテン語による講義目録に、「プロオイミオン」と呼ばれる序文を書くことを義務づけられていた。そのため、彼は半世紀の長きにわたって、半年に一度ラテン語で（のちにはドイツ語で）学識に富む「プロオイミオン」を書き続けた。これとは別に、彼は「雄弁ならびに詩歌の教授」の職責上、大学の公式行事や式典に際して、あるいは国王の誕生日の祝典に際して、ラテン語で祝詞を述べることを求められた。したがって、ラテン語で記されたり語られたりした大小さまざまな言述や演説だけでも、何冊もの書物となっている。[24]こうした言述や演説において、ベークはしばしばギリシア・ローマの古代世界を考察する形をとりながら、現代が直面しているさまざまな問題に対しても、機知に富む仕方で批判

的かつ的確に言及している。たとえば、ハレに住む友人マイヤーに宛てた一八四七年四月一八日付けの書簡では、ベークは次のように記している。「今年は七月から一〇月までに、三度演説をしなければなりません。わたしは前もって仕事をするのが好きなので、ドイツ語でする予定の近々の二つは、休暇中に仕上げてしまいました。二番目のものは〔国王の誕生日である〕八月三日に行なうものです。そこではフリードリヒ・ヴィルヘルム三世の治下での諸大学の状況を、とりわけ当地の大学の状況を、穏やかに、しかし腹蔵なく自由に、考察するつもりです」[25]、と。

ベークは一八二七年までは毎学期、ほぼ講義三つとゼミナール一つを担当している（付録1参照）。講義の一つは系統的なもので、韻律論、エンチクロペディー、古代ギリシア、ギリシア哲学史、ギリシア文学史、ローマ文学史などが交互に講じられているが、他の二つは作家ないし作品の解釈論であり、ギリシアとラテンの著作家が各学期に一名ずつ取り上げられている。一八二七年以後は、講義が一つ減らされて二つになっており、さらに一八三四年からはラテン文学史もラテン作家論も中止されている。これはカール・ラッハマン（Karl Lachmann, 1793-1851）という有能な若手の学者が、一八二九年にスタッフに加わり、ラテン文学関係の講義を彼に任せられるようになったからである。生涯を通じてベークが最も頻繁に取り上げた作家ないし思想家は、プラトン、ピンダロス、デモステネス、ソフォクレスであるが、これは彼が主力を注いだ研究領域とほぼ重なり合っている。エンチクロペディーの講義は、ベルリン時代には合計二十四回なされ、韻律論の二十六回に次いでいるが、このことからもこの授業が彼にとっていかに重要であったかがよくわかる。

もうひとつ忘れてならないのは、ベークがベルリン大学着任後すぐに、文献学のゼミナールの開設を申請したことである。彼の企画案は、一八一二年五月に文部省で承認され、ベルリン大学にはじめてこの種のゼミナールが成立した。正式な認可が下りるまでの二年間、ベークが開講した「文献学のつどい」（Philologische Gesellschaft）という科目は、ほぼこのゼミナールに相当するものと考えてよいであろう。このように、最年少の正教授として着任したベークは、次代を担う研究者ならびに教育者の育成に、並々ならぬ情熱をいだいていた。ゼミナールの定員は、定款によって十名が上限と定められていたが、付録1の統計資料が示しているように、実質的には毎学期それを二、三倍、ときには四倍も上回る数の履修者がいたことは、ベークのゼミナールがいかに好評であったかを

（一二七）

物語っている。

ベルリン大学におけるベークの活動は、研究ならびに教育に限定されてはおらず、先に言及したように、五度の学長職と六度の学部長職をこなしている。彼はこれ以外にも、学内の各方面でその手腕を発揮したが、当然のことながらその活躍は学内にはとどまらなかった。ベークの各種の学外活動のうち、最も重要なものはベルリン科学アカデミーにおけるそれであった。

四

「ベルリン科学アカデミー」(Akademie der Wissenschaften zu Berlin) は、一七〇〇年、ブランデンブルグ選帝侯に招かれたライプニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646-1716) の提唱で設立されたもので、初代の総裁（会長）はライプニッツ自身であった。その後、プロイセン国王の庇護のもとに正式名称を「王立プロイセン科学アカデミー」(Königlich Preußische Akademie der Wissenschaften) に改め、ロンドンの王立協会（ロイヤル・ソサエティ）（一六六〇年結成）やパリの王立科学アカデミー（一六六六年結成）に肩を並べるまでに発展したが、ベークは一八一四年五月一四日、弱冠二十九歳で科学アカデミーの会員に選ばれた。彼が属した「歴史学・文献学部門」には、シュライアーマッハー、フンボルト、ブットマン、イーデラー、ニーブールなどがいた。ベークはアカデミーに入会して間もなく、会員相互の研究をより大規模な共同研究事業に発展させるべきだと考え、その手始めとして、古代ギリシア文化圏の碑文を破損や散逸から救い、それらを批判的に校訂して資料化することを目的とした一大研究プロジェクトを、みずから科学アカデミーに提案した。一八一五年五月一二日、政府はこの研究計画を科学アカデミーの事業として採択し、向こう四年間の研究に対して六〇〇〇ターラーの助成金を交付することを決定した。こうして巨大なプロジェクトは緒に就いたが、しかしその遂行は決して容易なものではなかった。なぜなら、当初ニーブール、シュライアーマッハー、イーデラー、ヒルトなども協力を約束してくれていたが、いざ実際に研究に取りかかる段になると、さまざまな事情からそれが適わなかったからである。そのためベークも、一時はこのプロジェクトをご破算にしようと思ったが、ゲッティンゲンにいる忠実な弟子のミュラー (Karl Ottfried Müller, 1797-1840) やボンのヴェルカー (Friedrich Gottlieb Welcker, 1784-1868) などの協力によってようやく軌道に乗り、やがて十年の歳月を要して、一八

二五年に『ギリシア碑文集成』*Corpus Inscriptionum Graecarum* 第一輯がついに刊行されるに至った。この事業は科学アカデミーのプロジェクトとして継続されて、最終的には一八七七年に四巻本として完成されたが[26]、これはテオドーア・モムゼン（Theodor Mommsen, 1817-1903）を中心として遂行された、『ラテン碑文集成』*Corpus Inscriptionum Latinarum* の事業とともに、「王立プロイセン科学アカデミー」が行なった最も重要な学術的成果と見なされている。

科学アカデミーにおけるベークの重要な働きは研究面にとどまらない。彼は科学アカデミーの組織改革にも重要な役割を果たした。一八一七年四月二六日付けのニーブール宛ての書簡で、ベークは「アカデミーは死に体ですし、また死に体であり続けています。そしてフーフェラントがそれに関して、きわめて機知に富む論文を読んで聴かせても、それにもかかわらず、磁気療法ですらそれを生き返らせることはないでしょう。」[27]、と記しているが、一八一八年についに科学アカデミーの体質改善を図る委員会が結成され、ベークもその委員会のメンバーに任命された。ベークはシュライアーマッハーやサヴィニーと協力して改革案の作成に取り組んだが、彼は研究活動の共同性を促進するために、「物理学部門」（Physikalische Klasse）、「数学部門」（Mathematische Klasse）、「哲学部門」（Philosophische Klasse）、「歴史学・文献学部門」（Historisch-philologische Klasse）という四部門に分かれていた既存の区分を撤廃して、新たに「アカデミー全体を二分割して、数学・物理学部門と歴史学・哲学部門に分ける」ことを提案した。彼の提案は大きな賛同を得て、これが改革案の軸になった。この改革案はさらに多少の修正を施されて、最終的には一八三八年に政府によって認可された。

その間の一八三四年に、初代の書記シュライアーマッハーが逝去したため、この偉大な師であり友人であり同僚であった彼の後を承けて、ベークが「王立プロイセン科学アカデミー」の「哲学・歴史学部門」の第二代の書記に選出された[28]。会員の互選による投票で、ベークは十三票中の十票を獲得したが、彼に一票を投じたヴィルヘルム・フォン・フンボルトは、次のように述べてベークを推薦した。「その根本的で幅広い学識と、ドイツ国内と外国で博している名声と、試験済みの行政手腕と、そして公開講演のうまさとによって、ベーク氏はわれわれの書記の職に完全に適任である」[29]、と。その後ベークは、一八六一年にモーリッツ・ハウプト（Moriz Haupt, 1808-1874）にバトンタッチするまで、実に二十七年間もの長きにわたってこの要職を務めた。ハルナックが称しているよう

に、ベークがまさに「アカデミーの生ける中心点」(der lebendige Mittelpunkt der Akademie)[30]であったことは、この事実からもよくわかる。エルンスト・クルツィウス（Ernst Curtius, 1814-1896）は、ベークの生誕百年に際して、彼を「学問の王者」(König der Wissenschaft)[31]と呼んだが、これがあながち誇張ではないことは、ベークが一八一七年に出版した主著『アテナイ人の国家財政』*Die Staatshaushaltung der Athener* が、今日に至るまでその価値を失っていないことから裏づけられる。

『アテナイ人の国家財政』は、一八五一年に改訂され、一八八六年に増訂第三版が出版されたが、ギリシア経済史研究の面目を一新させた労作としてつとに有名である。G・P・グーチによれば、これは「ランケ以前にドイツ語で書かれた著作で後のものに凌駕されない唯一のものである」[32]という。それは貴金属、土地、鉱山、家屋、奴隷、家畜、衣服、食物などの価格や、各種の税金や国民の収入などを示す大量の資料に基づいて、アテナイ国家の財政機構を実証的に明らかにしようとした、まさにパイオニア的研究であり、それまでの「古典文献学を歴史科学に変化させた」[33]ものである。その書の「まえがき」(Vorerinnerungen)で、ベークは次のような苦言を呈している。

> 古代研究者の、とりわけ若手の古代研究者の大方は、それ自体としては決して軽蔑すべきではないが、しかし大抵はまったく取るに足らないものに向けられた言語研究を、……自己満足的に行なって得意になっている。数世紀前の真の文献学者たちは、そのような研究に安心感を見出さなかった。その名にしたがえばエラトステネスの後継者として、最高に幅広い情報を所有しているはずの当の人々は、そのような研究によって形式のなかに沈没して、上品な文法家へとやせ細る。そしてわれわれの学問は、〔現実の〕生ならびに学殖に備わる現在的視点からますます遊離するのである。[34]

ここにはすでに、文献学に対するベークの独自の理解と主張が簡潔に表現されているが、それがより鮮明になるのは、一八二五年から一八二七年にかけて熾烈に展開された、「ヘルマン―ベーク論争」(Hermann-Boeckh-Streit)を通してである。

五

しかしこの論争について見る前に、われわれはベークとベルリン大学における同僚たちとの人間関係を、一瞥してみたい。ベークの伝記記者マックス・ホフマンによれば、「大学の同僚のなかでは、ベークはシュライアーマッハー、ラウマー、ボップ、W・ディーテリツィ、Ed・ガンスに一番近かった。これとは対照的に、ヘーゲルとランケに対しては親密な関係は築かれなかった[35]」、と述べている。ラウマー以下は、必ずしもよく知られていないので簡単な注釈を加えておくと、まずラウマー（Friedrich Ludwig Georg von Raumer, 1781-1873）は歴史家であると同時に政治家でもあり、ブレスラウの歴史学教授を経て、一八一九年に国家学（Staatswissenschaft）の教授としてベルリンに招聘された。ボップ（Franz Bopp, 1791-1867）はサンスクリットの大家で、比較文献学の確立のため尽力したが、彼は一八二一から一八六四年までベルリン大学教授を務めた。W・ディーテリツィ（Karl Friedrich Wilhelm Dieterici, 1790-1859）は統計学と国民経済学の専門家で、一八三四年以降ベルリン大学のスタッフに加わった。ユダヤ系の法学者のEd・ガンス（Eduard Gans, 1798-1839）は、ヘーゲルの推挽で一八二〇年に私講師となり、一八二六年員外教授、その後間もなく正教授となり、一八三二年には法学部長に就任している。後述するヘーゲル学派の機関誌『学術批評年誌』の創刊にも一役買っている。

シュライアーマッハーは、すでに述べたように、ハレ時代のベークの師であり、彼をベルリンに招聘する際にも背後で動いているが、ベルリン大学では同僚として、また一八一四年以降は、ベルリン科学アカデミーの会員同士として、二人は深い信頼に結ばれていた。単なる師弟関係を超えて、両者の学問的ならびに思想的な影響関係を精査することは、きわめて意義深い課題であるが、この仕事はドイツでもまだ十分になされていないようである。いずれにせよ、シュライアーマッハーが開拓した解釈学が、ベークの文献学に及ぼした影響は甚大であり、シュライアーマッハーからベークを経て、ドロイゼン、そしてディルタイへと至る学問的系譜を解明することは、今後なされるべき重要な課題であろう。

次に、ベークとフンボルト兄弟との間の友情に満ちた関係も特筆に値する。ヴィルヘルム・フォン・フンボルトは、当時のプロイ

センの教育行政に圧倒的な影響力を持っていたが、一八一九年末に政府の職務から身を引き、その後はみずからの別荘で言語の研究に勤しんだ。ヴィルヘルム・フォン・フンボルトは、ベルリン科学アカデミーの会員として、以前からベークとは懇意にしていたが、公職を退いてからはベークとより親密な関係を持ち、諸民族の言語について、とくにギリシア語について意見交換をした。[36] 一八三五年に彼が亡くなったとき、ベークはベルリン科学アカデミーにおいて厳かな追悼演説を行ない、[37] ヴィルヘルム・フォン・フンボルトは、ヘラクレスのような崇高な考えをもった政治家であり、彼がなしとげた研究は、「より気高いものと真に人間的なものに対して目をそらすことなく」[38] なされたことで、理想的なものにまで高められている、と故人をたたえた。

弟のアレクサンダー・フォン・フンボルト（Alexander von Humboldt, 1769-1859）は、長年パリに住んでいたので初めのうちこそ交流はなかったが、彼が一八二七年パリからベルリンに居住地を移すと、兄ヴィルヘルムを介して間もなく親密な交流が始まった。アレクサンダーは地理学者として、古代の地理学や天文学をより詳しく究明しようと考えていたので、当然ベークが有している古代学の知識に並々ならぬ興味を抱き、両者の間には深い信頼と尊敬に満ちた互恵関係が成立した。彼はベークから古代学の基礎を学びたいと強く望み、一八三三／三四年の冬学期に、ベークの講義を聴講するために教室まで足繁く通った。これに関しては、当時の学生による以下のような証言がある。

> われわれ若い学生たちが、一八三四／三五年冬学期の午前九時頃に、ベークがその時間にギリシア文学史と古代の遺物について講ずる、第八講義室へと殺到するとき、薄暗い廊下で茶色の長い上着に身を包んだ、小柄で、白髪の、年配の、非常に楽しそうな男性も、民謡がそう変化させたように、「学生たち（ストゥーディオーシブス）によって」押されて講義室へと入った。この男性は文献学の学生アレクサンダー・フォン・フンボルトだった。彼がよく言ったように、彼はここで青年時代になおざりにしたことを取り戻したのであった。……講義室では、フンボルトは窓の近くの四番目か五番目の腰掛けに席を取り、そこで見栄えのしない書類入れから紙を少し取り出し、〔講義を〕書き取った。帰宅の途につく際に、彼は好んでベークにぴったり寄り添ったが、それはいわば会話によって古代世界から、彼なりの才気に富んだ仕方で、現代へと論理的な橋を架けるためであった。（エルンスト・コザック『ベルリ

ンならびにベルリンの生活』[39]）

グーチによれば、ベークの『アテナイ人の国家財政』は、「ニーブールがローマに対してなした復興をアテネに対してなしとげたものである[40]」が、実際この著作は「心からの尊敬のしるしとして、頭脳明晰にして寛大な古代の専門家バルトルト・ゲオルク・ニーブール」(dem scharfsinnigen und großherzigen Kenner des Alterthums Bartold Georg Niebuhr zum Zeichen inniger Verehrung)に献呈されている。そこから両者の関係もある程度は推測できる。ニーブールは、伝承の真偽を見きわめ、古代を可能な限りその現実の姿で示すことをみずからの課題とした、批判的歴史記述の創立者と見なされているが、ベークの仕事、とりわけ『アテナイ人の国家財政』は、このような批判的研究の記念碑とも言うべきものである。しかしニーブールの著作や遺稿のなかに、ベークに言及した箇所はほとんど見られない。ニーブールは一八一〇年から一八一二年までベルリン大学で教鞭を執った後、一八一三年にプロイセン司令部の一員として従軍し、一八一六年から一八二三年までプロイセンの駐ローマ大使を務め、帰国後はボンに住居を定めて、一八二五年以降当地の大学でとくに古代史を講じ、一八三一年一月二日に逝去した。

ベークとニーブールとの間には、何通もの手紙のやりとりがあり、ホフマンの『アウグスト・ベーク――伝記と学術的往復書簡選集――』には、ベークがローマのニーブールに宛てて書いた一八一七年一〇月一九日の書簡に始まり、一八二七年三月三一日付けのボンのニーブールからベークに宛てた言付け書きに至るまで、合計十四通の往復書簡が収録されている[41]。それを読むとなかなか興味深いが、両者の関係は、ベークが一八二七年に創刊されたヘーゲル学派の機関誌『学術批評年誌』*Jahrbücher für wissenschaftliche Kritik* に関与したことに、ニーブールが激しく立腹したことで、不幸な幕切れに終わってしまった。その原因は「ニーブールは気性が激し過ぎ、また好き嫌いがはっきりし過ぎている[42]」からであった。

さて、ベークとニーブールの関係にも暗い影を落としたヘーゲルであるが、彼は自分の哲学体系を熱狂的に信奉する弟子たちの感激によって自惚れており、またその思弁的傾向ゆえに文献学的考証には本来的に背を向けていた。ベークはニーブールに宛てた一八二六年一〇月二四日付けの書簡において、ヘーゲルに触れて次のように記している。

（一三三）

（一三四）

わたしは何年も前から、ヘーゲルとはかなりはっきりとした緊張関係に立っています。彼がやろうと努めていることすべて、彼の耐え難い党派形成、そしてとりわけきわめて倒錯した仕方で権力を笠に着て自分の信奉者を優遇すること、さらに彼の人格的本質の不快な性質は、たえずわたしに反感を起こさせましたし、彼もわたしを嫌悪していました。しかしわたしが学長をしている期間――有り難いことに、それももう終わりますが――、私見によれば哲学部が無責任にも彼をにっちもさっちもいかない状態に置いたある案件で、わたしは職責上、また良心にしたがって、彼を援助しなければなりませんでした。[43]

このように、ベークとヘーゲルの関係は決して良好なものではなかったが、その間接的背景として、ヘーゲルとシュライアーマッハーの確執ということもあったであろう。[44] しかしシュライアーマッハーやニーブールやベークとの緊張関係は、大部分、ヘーゲル自身の気質と学問のスタイルに起因していたと見るべきであろう。ランケもまたヘーゲルとは折り合いが良くなかったが、さりとて彼はシュライアーマッハーやベークともそれほど親しくはなかった。十九世紀のドイツ史学史では、ニーブールの批判的方法の樹立に始まり、ランケがこれを継承することによって完成させた、という見方がかつてはかなり一般的であったが、最近ではこういう見方は必ずしも通用しないという。いずれにせよ、ランケの基本的な研究方法からすれば、ベークと彼よりも十歳若い同僚との間には、もう少し親密な学問的ないし人格的な関係があってもよさそうだが、現存資料が示すかぎり、かかる関係は存在しない。ランケは一八二五年に招聘されて間もなく、ベークと仲の良かったラウマーと不仲になり、研究面でも政治面でも独自の道を進んだので、おそらくそれも一つの原因だったのかもしれない。

六

さて、それでは「ヘルマン―ベーク論争」であるが、主役を果たしたゴットフリート・ヘルマンは、一七七二年一一月二日にライプツィヒで生まれているので、ベークよりは十三歳ほど年長であった。十四歳で郷里のライプツィヒ大学に入学し、もともとは父親の希望に沿って法学を志した。しかしやがて古典語の研究を生涯の仕事と定めて、古典文献学の道に進んだ。フリードリヒ・ヴォル

フガング・ライツ（Friedrich Wolfgang Reiz, 1733-1790）を生涯の師とし、一七八九年に母校ライプツィヒ大学の員外教授、一八〇三年に正教授に就任した。彼は古典詩の韻律の研究に力を注いだが、カント哲学を応用した『韻律論の基本』*Elementa doctrinae metricae* (1816) は、彼の代表作と見なされている。ギリシア語ならびにラテン語の正確な知識こそが、古代世界の知的生活を明確に理解するための唯一の道であり、また古典文献学の中心的課題である、というのがヘルマンの持論であったが、その彼からすればベークの文献学理解は大いに問題であった。そこで『ギリシア碑文集成』第一輯が刊行された一八二五年に、それについての批判的な書評を書くことによって、ヘルマンの方からベークに論争を仕掛けた。

ヘルマンは『ライプツィヒ文学時報』二三八―二四一号にきわめて辛口の書評を寄せ、ベークの研究方法とその成果を激しく批判した。[45] これに対してベークは、『ハレ一般文学時報』二四五号に「反批判」(Antikritik) を載せて、ただちにこれに応酬した。[46] これに呼応して弟子のマイヤー (Moritz Hermann Eduard Meier, 1796-1855) も同誌に「分析」(Analyse) と題する反駁文を寄稿した。[47] するとヘルマンは、翌年『ベーク教授のギリシア碑文の取り扱いについて』*Ueber Herrn Professor Böckhs Behandlung der Griechischen Inschriften* (1826) を出版して、さらにベークとその学派を厳しく糾弾した。ベークはこれに対して、ニーブールが編集していたライン博物館の機関誌に、「アテナイ人の会計検査委員と執務審査官について」(Ueber die Logisten und Euthynen der Athener) と題する論文を寄稿して切り返した。[48]

この論争は文献学の本質規定に関わる重大な問題を含んでおり、ここで軽々に判断を下すことは出来ないが、文献学が取り組むべき主要課題を、古典の形式的方面の研究を主とした文法、および考証と考えるべきか、それとも言語を含む古典文化全般の内容理解と考えるかということが、両者の論争の根本的な対立点である。この両面は、ヴォルフにおいてはいまだ未分化なまま統一されていたが、次の世代になって文献学の深まりとともに分かれてきたのである。ギリシア語ならびにラテン語の形式的特質の解明力を注いだヘルマンは、「事柄の知識」(Sachekenntnis) と「言語の知識」(Sprachekenntnis) を峻別し、本来のフィロロギーはもっぱら後者に関わるものであるとして、次のように主張する。

（一三五）

したがって、〔事柄の文献学者と「文法家」との間の〕あの区別は、言語という言葉に付与された二つの意義の取り違えに基づいている。……すでにそれ自体として一つの民族の言語は、その精神の生き生きとした像としてその本質を最もよく特徴づけるところのものである。それによってはじめて一つの民族に固有な爾余の一切のものが、把握され理解されることができるということによって、言語はさらに重要なものとなる。……それにまた、もし事柄の知識が、ひとが事柄と好んで名づけるところのすべてのものを包括するとしても、それがまさにその部分の各々のものを解く鍵を、すなわち言語の知識を、ないがしろにしたり、いわんや軽蔑した目で考察したりするかぎりは、そのような事柄の知識は依然として一面的なものにとどまる。これに対して、真の文献学者たる者は、ひとは飛翔すればたしかに速く頂上に到達することができ、そこからは非常に多くのものを鳥瞰的に見渡せるが、何一つ正しく区別できないということをよく知っているので、それとは別の道を歩む。そして彼らは、古代人の精神的作品を最も高貴で最も重要なものとして尊重することによって、言語をそこまで登りつめるのは難しい古代全体への入り口と見なすのである。かくして彼らは、いろいろな困難に慣れており、そしてまさにそれゆえに謙虚であって、事柄の知識をも尊重するが、しかし両者〔言葉の知識と事柄の知識〕を目的に対する手段にすぎないものと見なす。その目的というのは、古典古代がすでにこの呼称によって予告しているもので、多くの学問の源泉として、また人格形成と嗜好との模範として奉仕するということである。[49]

さらに続けて、彼はこのように言う。曰く、

もし事柄の知識が文献学者の本来的本質を形づくるのであれば、ギリシア語やラテン語を理解しなくても、誰でもかなりの文献学者になれるであろう。なぜなら、古代に関する大抵の事柄は、ドイツ語、英語、フランス語、イタリア語の書物で非常に詳しく取り扱われているからである。それにまた、現代の事柄の文献学者は、すべての事柄についての知識をみずからのうちで統一することを、必ずしもよしとするわけではないので、そもそも本来いかなる事柄が正しい事柄であるのか、という問いが起こ

るであろう。各自は自分が研究している事柄こそ最も優れた最も必要なものだと言明するであろうから、これは事柄の文献学者自身の間での憂慮すべき論争に容易に導かれ得るであろう。これに対して、もし文献学の主眼が言語の知識に置かれるのであれば、少なくとも文献学に対しては、この方がはるかに正しい。第一に、言語の習得はすべてのもののなかで最も困難なものであるからであり、第二に、古い言語についての正確な知識は、どのみちすでに多様な事柄の知識――それなしには文献学はまったく不可能である。なぜなら、ほとんどすべての著作家は他の著作家を必要とするからである――を前提しているからであり、最後に第三として、言語は明らかに、若干の例外を除いて、われわれのすべての古代学がもともとそこから出発する中心点だからである。それゆえ、言語の知識をもつ者を文献学者と名づける人は、「ソノ重要ナモノヨリ名称ハ生ズ」(a potiori fit denominatio) という原則に従って、これをなすのである。[50]

これに対して、ベークは真っ向から対立する、次のような見解を表明している。

十分なる熟慮をもって、しかし詳しい説明に立ち入ることなく――ヘルマンが序言で述べたことは根本的であるが、それと同じくらい根本的な仕方で詳しい説明をこの場の数頁で行なうことはできない――、わたしは次のことを前提している。すなわち、文献学は、比較的完結した時代のある一定の民族に関しては、その活動の総体、つまりその民族の全生活と全働きを、歴史的・学問的に認識するものである、ということである。この生活と働きは、当然それによって生み出されたものも含めて、文献学によって考察されるべき事柄である。だがそれは、家族関係や国家関係がそれによって作り出される実際的なものであるか、あるいは宗教、芸術、知識などの理論的なものである。思考の形式としての言語が、わたしがここで簡潔に知識と呼んだ領域に属しているということは、容易に示されることができる。したがって、それはまた文献学が考察しなければならない事柄にもともに属している。しかし古代的な民族の活動の表現が、大部分は言語的な記念物において伝承されているかぎり、たとえそうした記念物が非言語的な事実や思考をも含んでおり、文献学者はそれを再認識すべきであるとしても、言語は文献学にとって、同時に、

（一三七）

古代の爾余のほとんどすべての産物を再認識するための手段であり、そして文献学は言語的な記念物から、言語自体の理解にとどまり続けることなく、事実と思考の全領域を叙述しなければならない。もちろん、個々の事象の研究に関しては、ヘルマンによっても推奨されている、できるかぎりの分業がなされるべきである。しかしこの分業は、工場生産方式のように、たとえば針が造られる場合であれば、一番目は針金を切断し、二番目はそれをとがらせ、三番目はてっぺんを回転させ、四番目は仕上げをするといった風に、あまり小さく細分化されてはならず、むしろ各々の有能な学者は、工場経営者の周到さを身につけると同時に、それなくしては単なる手工業者にすぎなくなってしまう、大きな展望を獲得すべく努めなければならない。[51]

「ヘルマン―ベーク論争」は学問的には決着がつかず、その対立は弟子たちへと引き継がれたが、ベークの文献学理解がいかに学術的に有意義であったかは、ベークの指導を受けた弟子たちの仕事を見ればよくわかる。たとえば、ヨーハン・グスタフ・ドロイゼン(Johann Gustav Droysen, 1808-1886)の名著『アレクサンドロス大王の歴史』*Geschichte Alexanders des Großen* (1833)や『ヘレニズムの歴史』*Geschichte des Hellenismus* (Bd. 1, 1836; Bd. 2, 1843)は、ベーク的研究方法を継承した見事な実例であるし、クルツィウスの文献学的業績もベークが敷いた軌道の延長線上で理解されなければならない。それはともあれ、ヘルマンとベークの間の人間的確執は、一八三七年八月にベークがライプツィヒにヘルマンを表敬訪問したことで氷解した。一八四八年に身罷ったヘルマンに対して、ベークは一八五〇年に開催された文献学者の全国大会で、議長としての開会演説において哀悼の意を表明し、先輩学者ヘルマンの学問的業績を高く評価したのであった。

七

ベークの文献学理解の大枠は、以上の考察からほぼ明らかであるが、そのコンセプトをより明確に把握するために、われわれはさらに『文献学的諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』を繙いて、それに基づいてベークの文献学を概観してみたい。[52] この書は門弟のブラトゥスヘックが、ベークの生前の講義を整理して出版したもので、そのもとになっているのは、一八〇八年夏学期(ハ

イデルベルク大学）を皮切りに、一八六五年夏学期（ベルリン大学）に至るまで、ベークが合計二十六学期にわたって行なった講義ノートである。[53] 紙幅の制約上、ここでは「序論」（Einleitung）におけるベークの議論（とくにS. 3-34）に的を絞り、その骨子を描き出すことを試みてみたい。彼の文献学の体系全体についての分析は、別の機会に譲りたいと思う。

ベークによれば、およそ一つの学問の概念は、そこに含まれる内容を断片的に数えて定められるものではない。いやしくも文献学が学問であるかぎり、文献学の真の概念は、その各々の部分の概念の共通要素を包括し、すべての部分は概念としてそれのうちに含まれ、各部分は全体の概念を表現するものでなければならない。単にその部分を列挙するだけで、文献学の定義を与えたとするわけにはいかない。ところで、文献学の本質に関する諸説を吟味する際、三つの観点から評価しなければならない。第一に、その見解が文献学を他の諸学問から区別すべき学問的概念を基礎としているかどうか、ということである。第二に、その定められた概念には、文献学という語の実際の意義に照らして、また文献学に経験的に固有なさまざまな努力に照らして、歴史的に存在したすべての内容が含まれているかどうか、ということである。第三に、文献学の本質を捉えるためには、文献学が本来的に大規模な学問であることをしっかり考えて、最初からその範囲を限定せず、従来のさまざまな概念のうちからこれを抽出することが必要である。ところで、従来存在した説には大きく分けて六つある。

(1)最も広く普及したものに、文献学はAlterthumsstudium（古代学）であるという考え方がある。しかし、それは語源上からPhilologiaと異なり、習慣上からも文献学に事実上属する一切の研究を網羅していない。Alterthumsstudiumは、ギリシア語では ἀρχαιολογία（古物学）にあたるが、これは φιλολογία とは別物である。文献学の対象は必ずしも古代に限るべきではなく、中世も近世もこれに入りうる。それに、古物学は古物に関する知識の集積にすぎず、そこには学問的統一がない。さらに言えば、文献学の対象をギリシア・ローマの古代に限るのは恣意的である。そのような考え方は、ヘブライ、インド、中国などの、東洋的な文献学一般に照らして維持できない。

(2)文献学をSprachstudium（言語研究）と同一視する考え方も、巷間に広く行き渡っているが、SpracheはGlossa（γλῶσσα 舌）であって、Logos（λόγος）ではない。文献学は、単に言語のみを取り扱うのではなく、内容たる思想も取り扱う。言語の研究は、

（一三九）

文献学の一部、それも必ずしも大部分ではなく、あくまで一部分にすぎない。

(3)取り扱う内容が広汎であるところから、文献学をPolyhistorie（博覧）と同一視する考えがあるが、それはなんの統一性も有しておらず、決して学問的概念と見なすことができない。単なる多知多識が学問でないことは、すでにヘラクレスも述べている。「博学は精神を生み出さず」（πολυμαθίη νόον οὐ φύει）[54]、と。

(4)このような漠然とした見方とは違って、Kritik（考証、批判）こそを文献学の専一的な課題と見なす見方がある。理性的な判断によって、真偽を鑑別し、考証するのは、博覧に比してはるかに学問的である。しかしそれは、文献学の形式的一面であるにすぎず、全体ではない。かつまた、それは単なるFertigkeit（熟練）、あるいはKunst（術）であって、学問ではない。文献学は、学問と見なされるべきであるならば、熟練や術とは異なったものでなければならない。

(5)ひとはしばしば文献学を、部分的に、Literaturgeschichte（文学史）と同一視する。しかし文学史は書物の形式の認識であり、文献学の主要部をなすとはいえ、全体をカバーするものではない。カントは文献学を「書物と言語についての批判的な知識」（kritische Kenntniss der Bücher und Sprachen）と定義しているが、この定義は経験的に正しくない。そのような知識は、学問的な連関を欠いた雑多な事物の集合についての情報にすぎないからである。

(6)多くの人はまた、文献学をHumanitätsstudium（人文学的研究）として捉える。だがこの定義も非学問的であり、漠然としている。それは文献学が純粋な人間性の形成に役立つという、その研究の実際的な有益性を引き合いに出すが、それだと文献学は単なる手段と見なされていることになる。人文主義的教養は、文献学の研究の結果であって、決して文献学の内実ではない。

このように、従来のさまざまな定義を批判した後で、概念規定が未だ不明確な状態を脱却して、最終的に文献学をどう定義するかということは、決して容易な事柄ではない。だが、われわれは従来のような一面的な見解には囚われないで、新たにこれについて考える必要がある。学問は統一的なものであり、しかも術とは異なって、宇宙の概念的認識である。一つの全体としての総合的学問が、理念の学たる哲学である。しかし、万有を物質的方面から捉えるか、あるいは理念的方面から捉えるか、自然としてか精神としてか、必然としてか自由としてか、という思惟方式に応じて、自然科学としての物理学と、精神科学としての倫理学という二つの学問が成

立する。文献学はいずれに属すであろうか。その内容は両者にまたがるが、そのいずれでもない。われわれは、文献学者としては、プラトンのようにphilosophierenしてはならないが、しかしプラトンの著作を、芸術的作品として、すなわち形式的方面においてのみならず、内容的方面においても理解しなければならない。それにまた、たとえばプラトンのTimaeosのごとき自然哲学的著作をも、イソップの童話や、ギリシア悲劇同様、理解し説明しなければならない。自然哲学を産出することは、文献学の任務ではないが、自然哲学の所産を理解することは、文献学の任務である。このことは、政治学や倫理学の方面でも、同じように言えることである。

以上のことから考えて、文献学の本来の任務は、「人間精神から産出されたもの、換言すれば、認識されたものの認識」(das Erkennen des von menschlichen Geist Producierten, d.h. des Erkannten)[55]である、と言い得るであろう。すなわち、文献学には、その再認識すべきための与えられた知識が、前提されている。かくして、一切の学問の歴史は、文献学的である。しかも、文献学と歴史の関係は、単にこれにとどまらず、文献学は、広義の歴史と密接な関係を有するものと考えられる。文献学は、認識された歴史(die erkannte Geschichte)を対象とする。すなわち、それは出来事に関する伝承の復原(die Wiederherstellung der Ueberlieferung über das Geschehene)を目的としており、単に出来事の叙述(die Darstellung des Geschehenen)ということを任務としてはいない。史記(Geschichtsschreibung)は文献学の目的ではなく、史記に書き記された歴史的知識の再認識(das Wiedererkennen der in der Geschichtsschreibung niedergelegten Geschichtskenntniss)こそ、その目的とすべきである。しかし、この文献学と歴史との区別は、実際上はなかなか困難で、歴史は、およそそれが根本資料を取り扱うかぎり、文献学的であるので、ただ事実上従来の歴史は、主として政治を取り扱い、その他の文化生活を単に政治の付属物として取り扱ったというその範囲で、文献学と区別すべきである。それゆえ、一般的に考えると、文献学は、歴史としては、認識されたことの認識(Erkenntniss des Erkannten)といえる。ただし、この認識されたことのなかには、人間の文化生活の一切の所産の、一切の表象を含む。このようにして、所与の認識というものの存在を前提とするところから、文献学は、報告なくしては成立しない。すなわち、語られたもしくは書記された言語を研究することが、最初の文献学的職能となる。

さて、文献学的職能の本質をこのように考えて、そこから従来の考えに立ち返ってみると、それぞれの説が有する意義が明瞭とな

（一四一）

る。すなわち、認識の最も一般的な道具が言語であるので、文献学はSprachwissenschaftであると考えられる。近世はなお生産の過程にあるのに対して、古代は遠く隔たっており、理解しがたく、また断片的であって、したがって再構成を最も必要とする。これが古代学と考えられる所以である。何らその対象を限定しないところから、文献学はおのずから博覧となる。文学は、文献学の主要資源であるところから、その歴史が文献学と同一視される。人文主義が目的とする人間的教養の内容は、文献学によって得られるので、両者は同一視される。このように、これらの一面的な文献学観は、いずれも文献学の概念のうちに、そのところを得るのである。

以上が、ベークの文献学の本質観の骨子であるが、このような概念把握に基づいて構想されたベークの文献学の体系は、付録2「アウグスト・ベークの文献学の体系」に示されるような、実に壮大な構えの学問体系となっている。

おわりに

以上、われわれはベークと彼を取り巻く人間関係を概観した上で、彼の主唱した文献学の基本特質について考察したが、われわれはグーチが指摘したように、ベークが古典文献学を歴史科学にまで発展させた点を高く評価したい。文献学といえば、ややもすれば単なる文献の原典批判や字句の解釈に従事する、いわゆる訓詁学を連想しがちであるが、ベークの考える文献学は、付録2「アウグスト・ベークの文献学の体系」にその骨格が示されているように、壮観なる文化科学の体系である。そこには年代学、地理、政治史、国家論、度量衡学、農業、商業、家政、宗教、美術、音楽、建築、神話、哲学、文学、自然科学、精神科学、言語などがすべて含まれている。

仄聞するところによれば、最近、中国における考古学的調査の進展によって、出土文字資料に対する研究が注目すべき成果を上げており、その結果として、伝統的な書誌学ないし文献学の見直しが迫られているという。[56] だが、ベークの文献学はこうした状況をすでに先取りした形で構想されており、出土文字資料研究に十分対応できる構えを備えている。十九世紀の前半に確立されたベークの文献学的体系には、たしかに時代的な制約もあり、またその後の研究によって追い抜かれてしまった部分も少なからずあるが、しかし少なくともその基本的コンセプトはいまでも揺るぎないものがある。衆目を集める奇抜な学説が、現れては消えていく現代世界に

あって、古びない魅力をもったものこそ真に価値がある。草創期のベルリン大学哲学部の「《スター軍団》の一人」(einer der „Sterne")[57]であったベークの文献学は、まさにこのような古典的価値をもったものである。われわれは本稿を踏まえて、次回はこのベークの文献学をさらに掘り下げて分析してみたい。

（二〇〇七・八・一八）

註

1 August Boeckh をどうカタカナ表記すべきかについては、従来、幾つかの異なった表記が通用しているが、われわれが詳しく調べた結果、これは「アウグスト・ベーク」と表記するのが正しい。以下それについて、少し説明を加えておく。

「日本文献学」を提唱した国文学者の芳賀矢一は、わが国にベークを紹介した最初の人の一人と思われるが、遺著『日本文献学』――これは明治四十年度東京帝国大学にてなされた講義を修整したものである――において、原語のまま、しかも oe ではなく ö の形で、「August Böckh」と表記している。したがって、芳賀がこれをどう発音していたかは、ここからは判別できない。ベークの《フィロロギー》から多くを学び、それをみずからの日本思想史研究の方法的基礎に据えた村岡典嗣も、しばしば原語表記(Boeckh)を用いたが、あえてカタカナ表記している場合には、「ベエク」と記している（村岡典嗣『増補　本居宣長1・2』平凡社、二〇〇六年）。歴史認識に関連してベークの貢献を高く評価した樺俊雄は、「ベエク」ではなく「ベェク」という表記を用いている（樺俊雄『歴史哲学概論』理想社、一九三五年）。ところが、村岡典嗣『増補　本居宣長1・2』の校訂者の前田勉は、その巻末の「解説」において、あえて表記を変更して「ベック」と記している。『岩波西洋人名辞典　増補版』（岩波書店、一九八一年）を参照すれば「ベック」となっているので、おそらく前田はこの表記に倣ったものと思われるが、これが正しいかどうかはあらためて問われなければならない。

まず英語の標準的な人名辞典である *Merriam-Webster's Biographical Dictionary* (Springfield, Mass.: Merriam-Webster, Inc., 1972) には、Böckh という見出しで出ており、その発音は〔bûk〕となっている。ちなみに〔ä〕の発音は、schön〔shûn〕Goethe

（一四三）

〔gū'tē〕におけるöないしoeのそれと同じである(p. 163)。次にベークの本国ドイツで出版されているドゥーデンの発音辞典によれば、これまた見出し項目はBöckhとなっているが、その発音はÖl〔ø:l〕の母音と同じ〔bø:k〕となっている(*Duden*. Band 6: *Aussprachewörterbuch. Wörterbuch der deutschen Standardaussprache*. 2., völlig neu bearbeitete und erweiterte Auflage. Bearbeitet von Max Mangold in Zusammenarbeit mit der Dudenredaktion. Mannheim: Duden Verlag, 1974, S. 184)。

以上の予備的考察からも、Boeckhの発音としては長音の「ベーク」が一番原語の発音に近いと思われるが、これだけではまだ納得しない方もあろうかと思われるし、そもそもBoeckhとBöckhのどちらが正しいのかという問題も残っている。そこでさらに踏み込んだ検証を試みてみたい。

まず、BoeckhかBöckhかという問題に関しては、これまでに出版された最も詳細な伝記的著作であるMax Hoffmannの*August Böckh. Lebensbeschreibung und Auswahl aus seinem wissenschaftlichen Briefwechsel* (Leipzig: Druck und Verlag von B.G. Teubner, 1901)が、これに明快な答えを与えている。ベーク本人は、自筆の書類や書簡では終始一貫してBöckhを用いており、ラテン語の著作でのみBoeckhiusと記したという(S. 2, Anm. 1)。この点に関しては、Ernst Vogt ("Der Methodenstreit zwischen Hermann und Böckh und seine Bedeutung für die Geschichte der Philologie," in *Philologie und Hermeneutik im 19. Jahrhundert. Zur Geschichte und Methodologie der Geisteswissenschaften*. Hrsg. von H. Flashar, K. Gründer, A. Horstmann [Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1979], S. 109, Anm. 14)もBernd Schneider (*August Boeckh. Altertumsforscher, Universitätslehrer und Wissenschaftsorganisator im Berlin des 19. Jahrhunderts. Ausstellung zum 200. Geburtstag 22. November 1985-18. Januar 1986* [Berlin: Staatsbibliothek Preußischer Kulturbesitz, 1985], S. 9)も、まったく一致した見解を示している。

次に、öないしoeの発音に関してであるが、Ursula Schaeferはこれを「長母音」(ein langer Vokal)であると明言している("Vorwort," Ernst Vogt & Axel Horstmann, *August Boeckh (1785-1867). Leben und Werk*. Zwei Vorträge [Berlin: Humboldt-Universität zu berlin, 1998], S. 6, Anm. 2)。

以上のような考察からして、われわれは「アウグスト・ベーク」という表記が最も適切であると判断し、以後はすべてこのように表記することにする。

ところで、ベークの名前がときにPhilipp Augustと記されていることに関して、ここで注意を促しておきたい。たとえば、ベークの伝記記者シュタルクは、"deren jüngstes Philipp August"と記しているが（K.B. Stark, "August Böckh," in: *Die Allgemeine Deutsche Biographie*, Bd. 3, S. 770）、これは明白な間違いである。これはベークがハイデルベルク大学に就職した際に、事務官がDr. phil. August Böckhと記したのを、誤読したために生じた間違いであるという。言うまでもなく、Dr. phil.はdoctor philosophiae〔lat.〕(Doktor der Philosophie) の略号であり、したがってphil.はPhilippの略ではない。Cf. Hoffmann, *August Böckh*, S. 2, Anm. 1.

2 August Boeckh, *Encyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften*, herausgegeben von Ernst Bratuscheck, 2. Aufl. besorgt von Rudolf Klussmann (Leipzig: Druck und Verlag von B.G. Teubner, 1886).

3 Johann Gustav Droysen, *Historik. Vorlesungen über Enzyklopädie und Methodologie der Geschichte*, herausgegeben von Rudolf Hübner, 5. unveränderte Aufl. (München: R. Oldenbourg, 1967). 最新の校訂版テクストとしては、Johann Gustav Droysen, *Historik. Rekonstruktion der ersten vollständigen Fassung der Vorlesungen (1857) Grundriß der Historik in der ersten handschriftlichen (1857/1858) und in der letzten gedruckten Fassung (1882)*. Textausgabe von Peter Leyh (Stuttgart-Bad Cannstatt: frommann-holzboog, 1977).

4 Droysen, *Historik*, S. 22; Johann Gustav Droysen, *Grundriss der Historik* (Leipzig: Verlag von Veit & Comp., 1868), S. 9.

5 Franklin L. Baumer, *Modern European Thought. Continuity and Change in Ideas, 1600-1950* (New York: Macmillan Publishing Co.; London: Collier Macmillan Publishers, 1977), p. 4.

6 ベーク―ドロイゼン―ディルタイというこの系譜は、実はさらに掘り下げると、シュライアーマッハーへと溯るものである。ディルタイ自身が明確にこのことを自覚している。Cf. Wilhelm Dilthey, *Gesammelte Schriften*, Bd. 7, *Der Aufbau der geschichtlichen*

（一四五）

Welt in den Geisteswissenschaft (Stuttgart: B.G. Teubner & Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1958), S, 114. シュライアーマッハーに発源するこの水脈を掘り起こし、「ベークとドロイゼンを越えてディルタイへと至るシュライアーマッハーの解釈学の道」(Frithjof Rodi, *Erkenntnis des Erkannten. Zur Hermeneutik des 19. und 20. Jahrhunderts* [Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1990), S. 7) を精確に跡づけることは、思想史研究を志す者にとってきわめて重要な課題である。

7 『波多野精一全集』第六巻（岩波書店、一九六九年）、三八九頁、および村岡晳「波多野精一博士のこと――村岡典嗣没後三十年――」『史想・随筆・回想』（太陽出版、一九八八年）、二五三―二六三頁参照。

8 村岡典嗣『増補　本居宣長2』（平凡社、二〇〇六年）、一五―三一頁参照。

9 村岡典嗣「日本思想史の研究方法について」『續　日本思想史研究』（岩波書店、一九三九年）、二五―四八頁所収、あるいは村岡典嗣『日本思想史概説　日本思想史研究Ⅳ』（創文社、一九六一年）、一三―二九頁参照。

10 ベークはイェーナ大学に入学することを希望したが、彼に奨学金を支給しているバーデン州当局が、イェーナは合理主義が支配的であるとの理由で、それを認めなかったので、彼はハレに赴いたという。

11 ベークはのちにヴォルフへの書簡において、「あなたがいらっしゃらなければ、わたしは貧しい神学者になっていたことでしょう」と述べているが、このことからも判るように、ヴォルフのベークに対する影響は決定的であった。だが、ディルタイによれば、シュライアーマッハーのベークに対する影響も「ヴォルフのそれに劣らず決定的であった」。「倫理学ならびに解釈学と批判に関するシュライアーマッハーの講義は、文献学についてのベークの理解を決定的に規定したのであった。」Wilhelm Dilthey, *Gesammelte Schriften*, Bd. 13, 2. Halfband, *Leben Schleiermachers 1803-1807*, herausgegeben von Martin Redeker (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1970), S. 144.

12 博士論文は『古代の調和について』*De harmonie veterum* と題するもので、これによってベークは一八〇七年三月一五日にハレ大学から博士号を取得した。

13 Cf. "Specimen editionis Timaei Platonis dialogi" (*Gesammelte kleine Schriften*, Bd. 3, S. 181-203 に収録)。

14 "Über die Bildung der Weltseele im Timaeos des Platon" (*Gesammelte kleine Schriften*, Bd. 3, S. 109-180 に収録)。

15 Cf. "De Platonis corporis mundane fabrica conflati ex elementis gemetrica ratione concinnatis" (1809) (*Gesammelte kleine Schriften*, Bd. 3, S. 229-252 に収録); "De Platonico systemate caelestium globorum et de vera indole astronomiiae Philolaicae" (1810) (*Gesammelte kleine Schriften*, Bd. 3, S. 226-293 に収録)。

16 August Boeckh, "Kritik der Uebersetzung des Platon von Schleiermacher," in *Gesammelte kleine Schriften*, Bd. 7, S. 1-38; hier S. 3.

17 Max Hoffmann, *August Böckh. Lebensbeschreibung und Auswahl aus seinem wissenschaftlichen Briefwechsel* (Leipzig: Druck und Verlag von B.G. Teubner, 1901), S. 17.

18 Hoffmann, *August Böckh*, S. 18.

19 ベッカーはベークと同い年で、二人とも一八〇六年のハレにおけるヴォルフのゼミの学生であるが、当時のヴォルフはベークよりもベッカーの方をより高く評価していた。ヴォルフは国王フリードリヒ・ヴィルヘルム三世への報告書のなかで、「現在の研究所のメンバーのなかでは、……ベッカーとベークが最も頭抜けていますが、前者がはるかに高い程度においてそうです」。しかし後年の両者の仕事ぶりを比較すれば、ヴォルフはおそらくこの評価を逆転させざるを得ないであろう。Cf. Bernd Schneider, *August Boeckh. Altertumsforscher, Universitätslehrer und Wissenschaftsorganisator im Berlin des 19. Jahrhunderts. Ausstellung zum 200. Geburtstag 22. November 1985-18. Januar 1986* (Berlin: Staatsbibliothek Preußischer Kulturbesitz, 1985), S. 32.

20 Johannes Schneider, "Das Wirken August Boeckhs an der Berliner Universität und Akademie," *Das Altertum* 15 (1969), S. 107; cf. Max Lenz, *Geschichte der königlichen Friedrich-Wilhelm-Universität zu Berlin*, Bd. 1, *Gründung und Ausbau* (Halle: Waisenhaus, 1910), S. 390, 431f.

21 ベークは一八一四―一五年、一八一九―二〇年、一八三二―三三年、一八三五―三六年、一八四四―四五年、一八四九―五〇年

（一四七）

に学部長を、一八二五―二六年、一八三〇―三一年、一八三七―三八年、一八四六―四七年、一八五九―六〇年に学長を務めた。

22　ウィーン体制下のプロイセンの文相アルテンシュタイン（Karl Altenstein, 1770-1840）の推挽によって、ヘーゲルがベルリン大学教授に就任したのは、一八一八年のことである。国家公認の哲学として、ヘーゲル哲学は二〇年代中葉以降まさに隆盛を極め、ヘーゲル自身一八二九／三〇年に学長に選出されている。しかしその名声の絶頂で、ヘーゲルは一八三一年にコレラにかかって急逝した。ベルリン大学へのヘーゲルの招聘、ならびに同大学における彼の働きについては、Volker Gerhardt, Reinhard Mehring, und Jana Rindert, *Berliner Geist. Eine Geschichte der Berliner Universitätsphilosophie* (Berlin: Akademie Verlag, 1999), S. 53-73を参照のこと。

23　ランケは一八二五年に員外教授として着任し、一八三四年から正教授に就任した。彼は一八七一年までその職にとどまったので、これもかなりの長さであるが、ベルリン大学との関わりで言えば、ベークにははるかに及ばないものがある。

24　生前に出版された三巻本の『小著作集』*Gesammelte kleine Schriften* は、すべてこの種の言辞や講演を収録したものである。Bd. 1, *Orationes in universitate litteraria Frederica Guilelma Berolinensi habitae*. Edidit Ferdinandus Ascherson. Leipzig: B.G. Teubner, 1858; Bd. 2, *Reden gehalten auf der Universität und in der Akademie der Wissenschaften zu Berlin*. Herausgegeben von Ferdinand Ascherson. Leipzig: B.G. Teubner, 1859; Bd. 3, *Reden gehalten auf der Universität und in der Akademie der Wissenschaften zu Berlin 1859-1862; und, Abhandlungen aus den Jahren 1807-1810 und 1863-1865*. Herausgegeben von Ferdinand Ascherson. Leipzig: B.G. Teubner, 1866.なお、没後さらに四巻が付け加えられ、現在では『小著作集』*Gesammelte kleine Schriften* は、七巻本となっており、二〇〇五年にヒルデスハイムのオームズ社からリプリント版が出ているが、参考までに残りの巻に関する書誌情報を記しておくと、以下の通りである。Bd. 4, *Opuscula academica berolinensia*. Ediderund Ferdinandus Ascherson, Ernestus Bratuscheck, Paulus Eichholtz. Leipzig: B.G. Teubner, 1874; Bd. 5, *Akademische Abhandlungen vorgetragen in den Jahren 1815-1834 in der Akademie der Wissenschaften zu Berlin*. Herausgegeben von Paul Eichholtz und Ernst Bratuscheck. Leipzig: B.G. Teubner, 1871; Bd. 6, *Akademische Abhandlungen vorgetragen in den Jahren 1836-1858 in*

der Akademie der Wissenschaften zu Berlin; nebst einem Anhange epigraphische Abhandlungen aus Zeitschriften enthaltend. Herausgegeben von Paul Eichholtz und Ernst Bratuscheck. Leipzig: B.G. Teubner, 1871; Bd. 7, *Kritiken; nebst einem Anhange*. Herausgegeben von Ferdinand Ascherson und Paul Eichholtz. Leipzig: B.G. Teubner, 1872.

25 Hoffmann, *August Böckh*, S. 340.

26 Cf. Hoffmann, *August Böckh*, S. 101.

27 Hoffmann, *August Böckh*, S. 211.

28 一七五九年にモーペルチュイ（Moreau de Maupertuis, 1698-1759）が亡くなって以後、ベルリン科学アカデミーには会長職は存在せず、プロイセン国王自身が保護者としてアカデミーの頂点に立っていたので、当時の書記職にはきわめて大きな意義が付与されていた。Cf. Johannes Schneider, "Das Wirken August Boeckhs an der Berliner Universität und Akademie," *Das Altertum* 15 (1969), S. 109.

29 Akademiearchiv Berlin, Abt. III[a]/3/133; 118（筆者未見）. Cf. Schneider, "Das Wirken August Boeckhs and der Berliner Universität und Akademie,", S. 109.

30 Adolf von Harnack, *Geschichte der königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin*, Bd. 1, 2 (Berlin: Akademie der Wissenschaften, 1900), S. 854.

31 Ernst Curtius, *Unter drei Kaisern: Reden und Aufsätze*, 2. Aufl. (Berlin: Hertz, 1895), S. 153f.

なお、クルツィウスはベークの高弟の一人で、一八三五／三六年の冬学期のゼミに名を連ねているが、のちに文献学者として大いに名を挙げた。彼は記念講演において、師のベークを次のように評しているという。曰く、

「ベークは、稀なる天賦を有した学問的天才である。厳密な方法で真理を明める事こそは、彼の生涯の悦びであった。彼はいかにも一個の歴史的探見者（Quellenfinder）たるにふさわしく、乾き果てた地上で底深く埋もれた宝をもとめて、吾人の知識を広むるすべを解した。精神的の多趣味は、彼をつねに清新ならしめた。彼は決して、博学の故に雑駁な物識とならなかっ

（一四九）

た。彼の哲学的官能と、審美的感情とは、彼をしてこゝに至らしめなかったのである。彼は、極めて些細な事実から、よく全体を看取した。彼は、極めて冷静な理性の活きを、理想に対する感激と結付ける術を知った。彼をして希臘文化の本質を捕へしめ、古詩人や古哲学者の精神の裡に生かしめたのは、実にこの故であった。」(E. Curtius, *Zum Gedächtniss an Chr. A. Brandis und A. Boeckh*, 1867. 筆者未見。引用は村岡典嗣著、前田勉校訂『増補本居宣長2』〔平凡社、二〇〇六年〕、二二―二三頁による)

32 G.P. Gooch, *History and Historians. In The Nineteenth Century*. With a new introduction by the author (Boston: Beacon Press, 1959), p. 20; グーチ、林健太郎・林孝子訳『十九世紀の歴史と歴史家たち』筑摩書房、一九七一年、三二頁。

33 Ibid.

34 August Boeckh, *Die Staatshaushaltung der Athener*, 3. Aufl. (Berlin, Georg Reimer 1896), S. XIX.

35 Hoffmann, *August Böckh*, S. 76.

36 アレクサンダー・フォン・フンボルトは、兄ヴィルヘルムの遺稿「ジャワ島におけるカヴィ語について」(Über die Kawi-Sprache auf der Insel Java) が、弟子のブッシュマンによって『人間の言語構造の相違性と、人類の精神的展開に及ぼすその影響について』*Über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluß auf die geistige Entwickelung des Menschengeschlechts* (1836) という表題で刊行されたとき、それに「序説」(Einleitung) を寄せたが、そこにおいてベークに触れ、次のように述べている。

「古典的古代全般にわたる深い知識の持主であり、我々兄弟共通の友人でもあるアウグスト・ベック〔ベーク〕に兄がいかに負うところ多大であるか、また、同氏の韻律論についての業績や、ギリシアの民族相互の相違性の及ぼした多様な影響についての研究が兄をいかに啓発したか、については、本書の記述が明らかにするところである。」(ヴィルヘルム・フォン・フンボルト、亀山健吉訳『言語と精神――カヴィ語研究序説――』法政大学出版局、一九八四年、五二八頁)

37 この追悼演説は、*Gesammelte kleine Schriften*, Bd. 2, S. 211-215 に収録されている。

38 Hoffmann, *August Böckh*, S. 77.

39 B. Schneider, *August Boeckh*, S. 54.

40 Gooch, *History and Historians*, p. 20; グーチ『十九世紀の歴史と歴史家たち』、三二頁。

41 Hoffmann, *August Böckh*, S. 209-228 に収録。

42 Boecks Brief an Otfried Müller, zitiert in: Hoffmann, *August Böckh*, S. 79.

43 Hoffmann, *August Böckh*, S. 224.

44 ヘーゲルとシュライアーマッハーの確執については、Richard Crouter, "Hegel and Schleiermacher: A Many-sided Debate," in *Papers of the Nineteenth Century Theology Working Group (AAR 1979 Annual Meeting)*, vol. 5, edited by James O. Duke and Peter C. Hodgson (Berkeley, California: Graduate Theological Union, 1979), pp. 57-80 参照。なお、増渕幸男『シュライアーマッハーの思想と生涯――遠くて近いヘーゲルとの関係――』（玉川大学出版部、二〇〇〇年）も参考になる。ちなみに、この書ではベークは「ボエックー」と表記されている。

45 この書評は、Gottfried Hermann, *Ueber Herrn Professor Böckhs Behandlung der Griechischen Inschriften* (Leipzig: Gerhard Fleischer, 1826), S. 17-65 に再録されており、以下における引用はこれを典拠としている。

この書評においてヘルマンは、『ギリシア碑文集成』というアカデミーの一大プロジェクトが、「たとえどんなに学識があり、また古典ギリシア文化のきわめて種々の部分に関する重大な功績によって有名であるとはいえ、ただ一人の人に委ねられているのを見ること」に、「いささか違和感」を覚えざるを得ないと言い（S. 18）、さらにそれに続けて、「もしこの作品がベッカー教授に、つまりギリシア語を真に理解し、大いなる思慮深さを有している人に、検査のために印刷前に提出されていたとすれば、この巻の少なくとも半分はより論拠の薄弱なものになったであろうが、しかしひとは半分ガ全部ヨリドレホド多イカ（ὅσῳ πλέον ἥμισυ παντός）を満足して知ったことであろう」（S. 19）と、歯に衣を着せぬ批判を展開している。

46 August Boeckh, "Antikritik", in: *Hallesche Allgemeine Literaturzeitung*, 1825, Nr. 245, 289-293. これは A. Boeckh, *Gesam-*

melte kleine Schriften, Bd. 7, S. 255-261と、G. Hermann, *Ueber Herrn Professor Böckhs Behandlung der Griechischen Inschriften*, S. 66-73の両方に再録されている。

47 Eduard Meier, "Analyse", in: *Hallesche Allgemeine Literaturzeitung*, 1825, Nr. 238-241. これもG. Hermann, *Ueber Herrn Professor Böckhs Behandlung der Griechischen Inschriften*, S. 78-180に再録されている。

48 August Boeckh, "Ueber die Logisten und Euthynen der Athener," in: *Rheinisches Museum*, Bd. 1 (1827), 39-107. これはA. Boeckh, *Gesammelte kleine Schriften*, Bd. 7, S. 262-328に収録されている。

49 Hermann, *Ueber Herrn Professor Böckhs Behandlung der Griechischen Inschriften*, S. 4; 8.

50 Ibid., S. 9-10.

51 August Boeckh, "Ueber die Logisten und Euthynen der Athener," in: *Gesammelte kleine Schriften*, Bd. 7, 264f.

52 「エンチクロペディー」といえば、ヘーゲルの*Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften* (1817)を思い浮かべる人も多いかもしれないが、この種の試みは何もヘーゲルに始まったものではない。すでに十八世紀以来、F.V. Molter, *Kurze Encyklopädie oder allgemeiner Begriff der Wissenschaften* (1772), J.F. Hartmann, *Encyklopädie der elektorischen Wissenschaften* (1784), C. G. Rössig, *Entwurf einer Encyklopädie und Methodologie der gesammten Staatswissenschaften und ihrer Hülfsdisciplinen* (1797), J.P. Harl, *Encyklopädie der gesammten Geld'wissenschaft* (1806)など、それぞれの学問分野において、その学科目の概念やそれが取り扱う対象や方法を、包括的・体系的に論述した書物が書かれ、また大学でもその種の講義がなされた。ベークの*Encyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften*も、当然のことながら、このような当時の慣行に従っており、それ自体としては決して独自的であるわけではない。しかし彼が文献学という体系に盛り込んだ豊かな内容と、それらを相互に秩序づけた透徹した方法は、やはり彼の天才的な洞察の賜物であるといってよかろう。

53 August Boeckh, *Encyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften*, 2. Aufl., herausgegeben von Ernst Bratuscheck und besorgt von Rudolf Klussmann (Leipzig: Druck und Verlag von B.G. Teubner, 1886). なお、一九六六年に

Wissenschaftliche Buchgesellschaft から刊行されたリプリント版は、タイトルも若干変更されているが、何よりも「序論」（Einleitung）と第一部の「文献学的学問の形式理論」（Formale Theorie der philologischen Wissenschaft）しか含んでおらず、全体のほぼ七割にあたる第二部の「古代学の内容的諸学科」（Materiale Disciplinen der Alterthumslehre）が完全に落とされているので、研究資料としては不十分である。Cf. August Boeckh, *Enzyklopädie und Methodenlehre der philologischen Wissenschaften*, herausgegeben von Ernst Bratuscheck (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesllschaft, 1996). なお、全体の目次については、付録2「アウグスト・ベークの文献学の体系」を参照されたい。

54 ベークはここでヘラクレイトスの言葉として、このようなギリシア語の語句を引用しているが、一般的に知られているのは「博学は精神に教えず」（πολυμαθίη νόον οὐ διδάσκει）（Herakleitos-Diog. Laertios, IX, 1,2,1）という表現であろう。

55 Boeckh, *Encyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften*, S. 10.

56 われわれの目に触れたその代表例は、朱淵清、高木智見訳『中国出土文献の世界――新発見と学術の歴史――』（創文社、二〇〇六年）であるが、それをめぐる『創文』（二〇〇六・一一　No.492）の特集「中国出土文献の世界」は、興味深い内容を含んでいる。とくに小南一郎「伝統的な書誌学はもう無力なのか」と、坂上康俊「出土文献研究と出土文字資料研究」を、ベークが提唱した文献学の構想と関連づけて読むと、ベークの先見性があらためて見えてくるように思われる。

57 V. Gerhardt et al., *Berliner Geist*, S. 55.

（一五三）

付録1　講義目録を中心としたアウグスト・ベークの年譜

ハイデルベルク大学時代（1807〜1811）

学期	担当科目				特記事項	備考
1807／08冬学期	ローマ文学史19	プラトン19	エウリピデス—タウリケのイピゲネイア16	テレンティウス10		
1808夏学期	古代ギリシア21	ピンダロス11	エウリピデス—タウリケのイピゲネイア14	デモステネス15		
1808／09冬学期	ギリシア哲学史12	プラウトゥス19	特別講義—タキトゥスのゲルマニア4			
1809夏学期	エンチクロペディー18	プラトン28	タキトゥス43	ゼミナール：ホラティウス12	特別講義1	1809・3・6正教授に就任 1809・10・4ドロテーア・ヴァーゲマンと結婚
1809／10冬学期	ローマ文学史14	イリアス24	テレンティウス12	ゼミナール13		
1810夏学期	古代ギリシア18	ピンダロス24	タキトゥス17	ゼミナール16	特別講義3	長男グスタフ誕生
1810／11冬学期	ギリシア哲学史25	エンチクロペディー25	デモステネス20	特別講義2		

ベルリン大学時代（1811〜1867）

学期	担当科目				特記事項	備考
1811夏学期	古代ギリシア12	韻律論40	ピンダロス15	テレンティウス18	文献学のつどい9	
	特別講義5					
1811／12冬学期	ローマ文学史16	ピンダロス56	プラトン29	キケロ37	文献学のつどい8	
	特別講義5					
1812夏学期	古代ギリシア12	韻律論17	プラトン15	プラウトゥス66	特別講義1	
1812／13冬学期	ギリシア哲学史18	ピンダロス16	タキトゥス25	ゼミナール6＋7	特別講義1	1812・5文献学ゼミナール認可される

1813夏学期	ピンダロス13	公開講義				
1813／14冬学期	プラトン19	公開講義	ゼミナール4＋1			
1814夏学期	古代ギリシア8	デモステネス17	公開講義		ゼミナール6＋2	
1814／15冬学期	韻律論19	ピンダロス25	タキトゥス―年代記44	ゼミナール10＋5	特別講義2	1814―15学部長（第1期）
1815夏学期	古代ギリシア19	テレンティウス16	ゼミナール8			ベルリン科学アカデミー入会
1815／16冬学期	ローマ文学史12	プラトン19	キケロ―ウェレス弾劾14	ゼミナール5＋5		
1816夏学期	エンチクロペディー12	ピンダロス18	タキトゥス―年代記34	ゼミナール7＋2		
1816／17冬学期	ギリシア哲学史17	プラトン24	タキトゥス―歴史29	ゼミナール6＋3		
1817夏学期	韻律論10	デモステネス21	ゼミナール8＋1	特別講義2		『アテナイ人の国家財政』刊行
1817／18冬学期	古代ギリシア35	ピンダロス19	タキトゥス―年代記28	ゼミナール6＋8	特別講義1	
1818夏学期	ギリシア哲学史16	プラトン38	タキトゥス―歴史37	ゼミナール9＋8	特別講義1	
1818／19冬学期	ローマ文学史20	デモステネス28	テレンティウス37	ゼミナール10＋8		
1819夏学期	ギリシア文学史36	プラトン38	タキトゥス―年代記60	ゼミナール7＋13		
1819／20冬学期	古代ギリシア45	ピンダロス56	テレンティウス33	ゼミナール20		1819―20学部長（第2期）
1820夏学期	エンチクロペディー30	韻律論28	デモステネス34	ゼミナール20		
1820／21冬学期	ローマ文学史26	プラトン65	タキトゥス―歴史38	ゼミナール10＋10		
1821夏学期	ギリシア文学史39	ピンダロス40	テレンティウス35	ゼミナール21		
1821／22冬学期	古代ギリシア54	デモステネス44	タキトゥス―年代記55	ゼミナール10＋17		

	次男アレクサンダー誕生	
		1814・1・27フィヒテ死去
		1818ヘーゲル正教授就任

1822夏学期	韻律論40	プラトン67	テレンティウス50	ゼミナール14＋25											
1822／23冬学期	エンチクロペディー44	ピンダロス64	タキトゥス―歴史76	ゼミナール10＋33											
1823夏学期	ギリシア文学史57	プラトン―ゴルギアス、テアイテトス61	タキトゥス―年代記42	ゼミナール10＋16											
1823／24冬学期	古代ギリシア88	ソフォクレス71	ゼミナール5＋23												
1824夏学期	ローマ文学史84	デモステネス61	タキトゥス―歴史48	ゼミナール13＋18	三男リヒャルト誕生										
1824／25冬学期	韻律論73	ピンダロス86	テレンティウス61	ゼミナール37											
1825夏学期	エンチクロペディー84	プラトン100	タキトゥス―年代記53	ゼミナール10＋28											
1825／26冬学期	古代ギリシア124	ソフォクレス74	ゼミナール10＋34		1825―26学長（第1期）										
1826夏学期	ギリシア文学史116	デモステネス72	ゼミナール5＋31												
1826／27冬学期	韻律論65	ピンダロス74	タキトゥス―歴史61	ゼミナール5＋27											
1827夏学期	エンチクロペディー64	プラトン80	ゼミナール11＋30												
1827／28冬学期	古代ギリシア91	ソフォクレス87	ゼミナール9＋30												
1828夏学期	ギリシア文学史94	デモステネス57	ゼミナール7＋35		『ギリシア碑文集成』第1輯刊行										
1828／29冬学期	韻律論78	ピンダロス83	ゼミナール7＋33		1829・2・2妻ドロテーア死去										
1829夏学期	エンチクロペディー65	プラトン67	ゼミナール9＋21												
1829／30冬学期	古代ギリシア137	タキトゥス―歴史74	ゼミナール7＋32												

（一五六）

1830夏学期	ギリシア文学史113	ソフォクレス110	ゼミナール8＋31			
1830／31冬学期	韻律論93	ピンダロス109	ゼミナール5＋26			1830・9・18アンナ・ホフマンと再婚
1831夏学期	エンチクロペディー83	プラトン108	ゼミナール6＋30			1830―31学長（第2期）
1831／32冬学期	古代ギリシア91	タキトゥス―年代記62	ゼミナール7＋26			
1832夏学期	ギリシア文学史73	デモステネス41	ゼミナール10＋30			
1832／33冬学期	韻律論62	ピンダロス71	ゼミナール10＋23			1832―33学部長（第3期）
1833夏学期	エンチクロペディー62	プラトン55	ゼミナール4＋25			
1833／34冬学期	古代ギリシア96	ソフォクレス77	ゼミナール5＋29			
1834夏学期	韻律論69	テレンティウス54	ゼミナール10＋29			ベルリン科学アカデミー書記長就任
1834／35冬学期	ギリシア文学史115	ピンダロス64	ゼミナール8＋19			
1835夏学期	エンチクロペディー82	プラトン75	ゼミナール10＋20			
1835／36冬学期	古代ギリシア118	ソフォクレス65	ゼミナール6＋28			1835―36学部長（第4期）
1836夏学期	韻律論100	ゼミナール6＋28				
1836／37冬学期	ギリシア文学史113	ピンダロス70	ゼミナール11＋25			

1830夏学期						
1830／31冬学期					1831・1・2ニーブール死去 1831・11・14ヘーゲル死去	
1831夏学期						
1831／32冬学期						
1832夏学期						
1832／33冬学期						
1833夏学期						
1833／34冬学期					アレクサンダー・フォン・フンボルトこの学期に受講 1834・2・12シュライアーマッハー死去 1834・3ランケ正教授に昇進	
1834夏学期						
1834／35冬学期					1835・4・8ヴィルヘルム・フォン・フンボルト死去	
1835夏学期						
1835／36冬学期						E・クルツィウス、ゼミを履修
1836夏学期						
1836／37冬学期						

1837夏学期	エンチクロペディー107	ゼミナール8＋17				
1837／38冬学期	古代ギリシア126	プラトン102	ゼミナール11＋30		1837—38学長（第3期）	
1838夏学期	韻律論82	ソフォクレス69	ゼミナール9＋18			
1838／39冬学期	ギリシア文学史116	ゼミナール10＋25				
1839夏学期	エンチクロペディー70	ピンダロス72	ゼミナール4＋29			
1839／40冬学期	古代ギリシア90	プラトン61	ゼミナール8＋23		1839冬から1843春まで（41夏除く）、ブルクハルト、ベルリン大学で学ぶ	
1840夏学期	韻律論68	ソフォクレス57	ゼミナール10＋24		1840・8長男グスタフ死去	1840・8愛弟子オトフリート・ミュラー死去
1840／41冬学期	ギリシア文学史62	デモステネス46	ゼミナール7＋26			
1841夏学期	エンチクロペディー49	ピンダロス44	ゼミナール12＋16			
1841／42冬学期	古代ギリシア79	プラトン65	ゼミナール10＋34			
1842夏学期	韻律論65	ソフォクレス47	ゼミナール6＋26			
1842／43冬学期	ギリシア文学史81	デモステネス46	ゼミナール10＋25			
1843夏学期	エンチクロペディー74	ピンダロス49	ゼミナール10＋21			
1843／44冬学期	古代ギリシア98	プラトン54	ゼミナール9＋30			
1844夏学期	韻律論60	ソフォクレス53	ゼミナール7＋28			
1844／45冬学期	ギリシア文学史97	デモステネス28	ゼミナール6＋28		1844—45学部長（第5期）	
1845夏学期	エンチクロペディー74	ピンダロス40	ゼミナール6＋19			
1845／46冬学期	古代ギリシア79	プラトン49	ゼミナール7＋20			

1846夏学期	韻律論46	ソフォクレス39	ゼミナール10＋19				
1846／47冬学期	ギリシア文学史95	デモステネス47	ゼミナール10＋23			1846—47学長（第4期）	
1847夏学期	エンチクロペディー53	ピンダロス48	ゼミナール10＋19				
1847／48冬学期	古代ギリシア102	プラトン40	ゼミナール10＋32				
1848夏学期	韻律論51	ソフォクレス27	ゼミナール10＋19				
1848／49冬学期	ギリシア文学史61	デモステネス24	ゼミナール6＋30			1848・12・31ヘルマン死去	
1849夏学期	エンチクロペディー59	ピンダロス44	ゼミナール10＋20				
1849／50冬学期	古代ギリシア87	プラトン51	ゼミナール10＋28			1849—50学部長（第6期）	
1850夏学期	韻律論62	ソフォクレス54	ゼミナール10＋30				
1850／51冬学期	ギリシア文学史88	デモステネス36	ゼミナール8＋27			1851・3・13カール・ラッハマン死去	
1851夏学期	エンチクロペディー66	ピンダロス47	ゼミナール10＋16			『アテナイ人の国家財政』第2版刊行	
1851／52冬学期	古代ギリシア83	プラトン55	ゼミナール7＋27				
1852夏学期	韻律論56	ソフォクレス35	ゼミナール10＋17				
1852／53冬学期	ギリシア文学史65	ゼミナール11＋26					
1853夏学期	エンチクロペディー41	ピンダロス31	ゼミナール7＋30			長兄ヨーハン・ゲオルク死去	
1853／54冬学期	古代ギリシア46	デモステネス26	ゼミナール10＋16				1853秋以降、ディルタイ、ベルリン大学で神学、歴史学、哲学を学ぶ
1854夏学期	韻律論47	ソフォクレス32	ゼミナール6＋20				長姉フリーデリケ死去
1854／55冬学期	ギリシア文学史77	プラトン30	ゼミナール10＋26				

1855夏学期	エンチクロペディー56	ピンダロス33	ゼミナール10＋28														
1855／56冬学期	古代ギリシア70	デモステネス32	ゼミナール10＋23														
1856夏学期	韻律論49	ソフォクレス40	ゼミナール10＋14														
1856／57冬学期	ギリシア文学史69	プラトン39	ゼミナール10＋23														
1857夏学期	エンチクロペディー56	ピンダロス40	ゼミナール10＋17													1857・3・15博士取得50周年記念祝賀会	
1857／58冬学期	古代ギリシア76	デモステネス34	ゼミナール11＋15														
1858夏学期	韻律論69	ソフォクレス44	ゼミナール10＋17													『小論集』第1巻刊行 次姉マリー死去	
1858／59冬学期	ギリシア文学史70	プラトン54	ゼミナール10＋30														
1859夏学期	エンチクロペディー69	ピンダロス39	ゼミナール11＋28														
1859／60冬学期	古代ギリシア109	ゼミナール11＋35														1859－60学長（第5期） 『小論集』第2巻刊行	
1860夏学期	韻律論89	ゼミナール10＋39															
1860／61冬学期	ギリシア文学史115	ゼミナール10＋37															
1861夏学期	エンチクロペディー118	ゼミナール10＋29															
1861／62冬学期	古代ギリシア115	ゼミナール10＋37															
1862夏学期	韻律論112	ゼミナール10＋42															
1862／63冬学期	ギリシア文学史156	ゼミナール10＋33															
1863夏学期	エンチクロペディー114	ゼミナール11＋36															

三兄クリスティアン・フリードリヒ死去

1859ドロイゼン正教授就任

1959・5・6アレクサンダー・フォン・フンボルト死去

ベルリン大学創立50周年

1861・10・25サヴィニー死去

ブラトウスヘック、ベークのゼミを受講

1863／64冬学期	古代ギリシア158	ゼミナール10＋37					
1864夏学期	韻律論118	ゼミナール11＋30					
1864／65冬学期	ギリシア文学史129	ゼミナール10＋23					1864ディルタイ教授資格獲得（トレンデレンブルクとベークが審査にあたる）
1865夏学期	123エンチクロペディー	ゼミナール10＋22					1865ブラトウスヘック教授資格獲得
1865／66冬学期	古代ギリシア113	ゼミナール10＋20					
1866夏学期	韻律論103	ゼミナール10＋19					『小論集』第3巻刊行
1866／67冬学期	ギリシア文学史95	ゼミナール10＋24					
1867夏学期	ゼミナール7＋20						1867・3・15ベルリン名誉市民。1867・8・3死去
							1867・10・23フランツ・ボップ死去

注：科目名の後の数字は受講者数。ゼミナールに関しては、正規の学生の数字のあとに、非正規の学生（他大学・他機関からの聴講生）の数がプラスされている。

典拠："Verzeichnis der von Böckh gehaltenen Vorlesungen," in: Max Hoffmann, *August Böckh. Lebensbeschreibung und Auswahl aus seinem wissenschaftlichen Briefwechsel* (Leipzig: Druck und Verlag von B.G. Teubner, 1901), S. 467-469.

付録2　アウグスト・ベークの文献学の体系

序論（Einleitung）

Ⅰ. 文献学の理念、またはその概念、範囲、最高目的（Die Idee der Philologie oder ihr Begriff, Umfang und höchster Zweck）

Ⅱ. とくに文献学に関連しての総覧の概念（Begriff der Encyklopädie in besonderer Hinsicht auf die Philologie）

Ⅲ. 文献学的学問の総覧についての従来の試み（Bisherige Versuche zu einer Encyklopädie der philologischen Wissenschaft）

Ⅳ. 総覧と方法論の関係（Verhältniss der Encyklopädie zur Methodik）

Ⅴ. 全研究の資料と補助手段（Von den Quellen und Hülfsmitteln des gesammten Studiums）

Ⅵ. われわれの計画の草案（Entwurf unseres Planes）

第一主要部（Erster Hauptheil）

文献学的学問の形式論（Formale Theorie der philologischen Wissenschaft）

一般的概観（Allgemeine Ueberblick）

第一部（Erster Abschnitt）—解釈学の理論（Theorie der Hermeneutik）

解釈学の定義と区分（Definition und Eintheilung der Hermeneutik）

1. 文法的解釈（Grammatische Interpretation）
2. 歴史的解釈（Historische Interpretation）
3. 個人的解釈（Individuelle Interpretation）
4. 種類的解釈（Generische Interpretation）

第二部（Zweiter Abschnitt）—考証学の理論（Theorie der Kritik）

考証学の定義と区分（Definiton und Eintheilung der Kritik）

1. 文法的考証（Grammatische Kritik）
2. 歴史的考証（Historische Kritik）
3. 個人的考証（Individuelle Kritik）
4. 種類的考証（Generische Kritik）

第二主要部（Zweiter Hauptheil）

古代学の内容的諸学科（Materiale Disciplinen der Alterthumslehre）

第一部（Erster Abschnitt）—一般古代学（Allgemeine Altertumslehre）

前置き（Vorbemerkungen）

1. 古代ギリシアの特質（Charakter des griechischen Alterthums）
I. 国家生活（Staatsleben）
II. 私的生活（Privatleben）
III. 儀礼および美術（Cultus und Kunst）
IV. 学問（Wissen）
2. 古代ローマの特質（Charakter des römischen Alterthums）
古典古代の世界史的意義（Weltgeschichtliche Bedeutung des klassischen Alterthums）

第二部（Zweiter Abschnitt）—特殊古代学（Besondere Alterthumslehre）
I. ギリシア人ならびにローマ人の公的生活について（Vom öffentlichen Leben der Griechen und Römer）
一般的概観（Allgemeine Ueberblick）
1. 年代学（Chronologie）
2. 地理（Geographie）
3. 政治史（Politische Geschichte）
4. 古代国家（Staats-Alterthümer）

II. ギリシア人とローマ人の私的生活（Privatleben der Griechen und Römer）
一般的概観（Allgemeine Ueberblick）
1. 度量衡学（Metrologie）
2. 外的な私的生活あるいは経済の歴史（Geschichte des äussern Privatlebens oder der Wirthschaft）
a. 農業と工業（Landbau und Gewerbe）
b. 商業（Handel）
c. 家政（Hauswirthschaft）
3. 内的な私的生活あるいは社会の歴史（Geschichte des inneren Privatlebens oder Gesellschaft）
a. 社交（Geselliger Verkehr）
b. 営利団体（Erwerbsgesellschaft）
c. 教育（Erziehung）
d. 葬儀（Todtenwesen）

III. 外的宗教および美術について（Von der äusseren Religion und der Kunst）
一般的概観（Allgemeine Ueberblick）
1. 祭儀または外的宗教（Cultus oder äussere Religion）
a. 神事としての祭儀（Der Cultus als Gottesdienst）

（一六三）

b. 儀礼的行為 (Die Culthandlungen)
c. 宗教教育としての儀礼 (Der Cultus als religiöse Erziehung)
d. 神秘 (Die Mysterien)
2. 美術史 (Geschichte der Kunst)
A. 造形美術 (Bildende Künste)
a. 建築 (Architektur)
b. 塑像術 (Plastik)
c. 絵画 (Malerei)
B. 運動的美術 (Künste der Bewegung)
a. 体操術 (Gymnastik)
b. 舞踏 (Orchestik)
c. 音楽 (Musik)
C. 詩的演出の美術 (Künste des poëtischen Vortrags)
a. ラプソディー (Rhapsodik)
b. 合唱 (Chorik)
c. 演劇 (Dramatik)

Ⅳ. 古典古代の総合的知識について (Von dem gesammten Wissen des klassischen Alterthums)
一般的概観 (Allgemeine Ueberblick)
1. 神話 (Mythologie)
2. 哲学史 (Geschichte der Philosophie)
3. 個別諸科学の歴史 (Geschichte der Einzelwissenschaften)
a. 数学 (Mathematik)
b. 経験的自然科学 (Empirische Naturwissenschaften)
c. 経験的精神科学 (Empirische Geisteswissenschaften)
4. 文学史 (Literaturgeschichte)
ギリシア文学史 (Geschichte der griechischen Literatur)
A. 韻文 (Poesie)
a. 叙事詩 (Epos)
b. 叙情詩 (Lyrik)
c. 劇詩 (Drama)
B. 散文 (Prosa)
a. 歴史的散文 (Historische Prosa)

b. 哲学的散文（Philosophische Prosa）
c. 修辞的散文（Rhetorische Prosa）
ローマ文学史（Geschichte der römischen Literatur）
A. 韻文（Poesie）
a. 劇詩（Drama）
b. 叙事詩（Epos）
c. 叙情詩（Lyrik）
B. 散文（Prosa）
a. 歴史的散文（Historische Prosa）
b. 修辞的散文（Rhetorische Prosa）
c. 哲学的散文（Philosophische Prosa）
5. 言語の歴史（Geschichte der Sprache）
A. 語素学（Stöchiologie）
a. 音韻学（Phonologie）
b. 古字学（Paläographie）
c. 正字学ならびに正音学（Orthographie und Orthoëpie）
B. 語源学（Etymologie）
a. 辞書学（Lexikologie）
b. 語形学（Formenlehre）
C. 統語論（Syntax）
D. 歴史的文体学（Historische Stilistik）
韻律論（Metrik）

典拠：August Boeckh, *Encyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften*, herausgegeben von Ernst Bratuscheck; 2, Aufl., besorgt von Rudolf Klussmann (Leipzig: Druck und Verlag von B.G. Teubner, 1886), S. VII-X.